

第7章

都市化と社会的連帯

—— 上エジプト農村とアレキサンドリア市 港湾労働者社会の事例比較 ——

第1節 序論－問題関心の設定

1. 都市化と社会的連帯をめぐる問題状況

第三世界の都市化は、1960年代以降、国際的な労働力移動と結びつきながら急速な展開を見せている。中東地域について見るなら、従来の西ヨーロッパ先進工業国に向かう流れ（トルコから西独へ、マグレブ諸国からフランスへ）に加え、70年代後半以降、アラブ産油国に向かう労働力移動の流れが激増し、国内人口移動と都市化の動きを加速させている⁽¹⁾。

この産油国出稼ぎと結びついた中東における都市化の過程は、世界的な経済システムの変動の重要な一部をなしていると言えるが、と同時にさまざまな文化領域にまたがる複合的な社会変容の過程としても捉えることができる。そしてその場合、都市化現象は、現代の中東社会の変容の全過程におけるいわば主旋律を奏でていると言ってよいほどの重要性をもっている。

たとえば、都市化現象が政治変動の領域にどのようなインパクトを与えたかについて見てみるなら、現代中東の政治危機が、すぐれて急速に変貌する

都市空間を舞台として発生してきたことに気づかれるだろう。とくにイラン革命をもっとも激烈な例として、70年代以降、しばしば組織的な社会運動の形態を採らない大規模な民衆の「暴動」やイスラム復興運動の暴力的直接行動が作り出す震動の波が、中東の多くの主要都市を襲った。

なぜなら、これらの民衆暴動の背景である物理的・精神的な剝奪感が主要都市を中心に渦巻いたのは、そこが今日的な国際的経済システムの変動の中において進行した中東各国の国民経済の「開放化」^{インフイターハ}の帰結である経済的・文化的矛盾の集約点となっていたからである。そして、70年代以降の政治変動研究の主題となったイスラム復興運動の分析において、その運動の参加者が農村や地方都市出身の若年有知識層を主体としているとしばしば指摘される問題も、同様に社会変容としての都市化というコンテクストにおいて十分に議論さるべきであろう⁽²⁾。

さて、こうした体制側から見た都市を舞台とする「政治危機」は、別の視角からすれば、社会運動の今日的な新しい展開と捉えることもできる。たとえば、エジプトの近代史の諸局面を特徴づけてきたのは、民族運動の展開を軸とし、その時どきの社会問題の深刻化を背景とする都市民衆の直接的政治行動の諸形態であった⁽³⁾。

そしてエジプト近代史におけるこれらの民衆「暴動」を相互に比較する時、ひとつの興味深い事例と言えるのが、1952年革命以来初めての戒厳令が出された1977年1月の「食糧暴動」である。すなわち、事件直後のエジプト内務省による暴動の実態に関する報告を見るなら、そこには約180年前に起きたカイロ民衆の反ナポレオン軍暴動(1798年)に関する年代記者ジャバルティーの記述の再現を読む思いがする⁽⁴⁾。もちろんこの場合の記述内容の類似性(たとえば、群衆、下層民に対する用語)は⁽⁵⁾、その用語法に発現する国家的支配における伝統的性格の継承を意味するものと見なすことができないわけではないが、むしろここで問題としたいのは、次のことである。すなわちこれら二つの「暴動」(あるいは「伝統的反抗」という社会運動の基盤となる都市民衆の社会的連帯意識が近代エジプトにおける都市化という社会空間の変容過程

とどのような結びつきを持っていたか、という問題である。

ところで、カイロを事例としエジプトのみならず第三世界の都市化現象の特質を分析した著名な都市社会学者にJ・アブー・ルゴッド(Janet Abu-Lughod)がいる。彼女の研究「移住者の都市生活への適応：エジプトの事例」(1960年)⁽⁶⁾の最大の貢献は、産業化を随伴しない第三世界の都市化、とくに「過度の都市化」(over-urbanization)⁽⁷⁾といわれる状況において発生する「都市の農村化」(ruralization)現象の進行である。

カイロやアレキサンドリアを例にとれば、19世紀から今世紀前半において、伝統的な街区(hāra)をもって構成される旧市街の外に、「街路(shāri')」を張りめぐらした近代ヨーロッパ的な都市計画にもとづく市街区が形成された⁽⁸⁾。そして、こうした新しい形の市街区の発展は、近代エジプトに形成された棉花輸出経済の発展と結びついたものであった。しかし、この棉花輸出経済の発展が国内的には主として生態学条件から土地／人口バランスの破綻によって閉塞状況に陥り、農村過剰労働力の問題が深刻化するに伴い、これらの近代的計画都市に向かって大量の農村人口が流入する時代がおとずれる。これらの農村出身者は、近代的市新市街の一部や旧市街をスラム化する一方、さらに都市の外縁部に自らの街区を作り、農村的な生活様式・価値観が支配的な居住空間を形成することになる。この後者の過程が「都市の農村化」と呼ばれる現象である⁽⁹⁾。

さて、この「都市の農村化」現象において、本稿の主題に関連するポイントは、街区という居住空間と「農村的」あるいは「伝統的」な社会関係との間に結ばれた親和的關係である。すなわち、街区は、伝統的都市の政治的社会的単位(誤解を恐れずに言えば、伝統的な「都市共同体」の基礎単位)であるが、同時に、しばしばエジプトの農村の居住区構成(それは、多くの場合、親族単位と結びついている)の基礎単位を示す呼称としても用いられてきたからである⁽¹⁰⁾。

前者の街区という社会空間の特殊性については、たとえば、ノーベル賞作家ナギーブ・マハフーズ(Najīb Maḥfūz)の一連の小説が、われわれに多く

の素材を提供している。とくに、『我等が街区の末裔たち』(awlād ḥāratina) という発禁処分を受けた宗教的パロディー小説は、カイロ郊外の架空の街区を舞台としながら、そこに再生産される社会関係、とりわけそれがフトゥワ (futūwa) と呼ばれる伝統的都市的人間類型と結びついた暴力行為に反映される社会的連帯意識と街区的社会空間の親和性を、象徴的に描き出している⁽¹¹⁾。

ここで重要なのは、こうしたフトゥワ的人間類型が示す伝統的都市空間に発生する暴力的社会関係、あるいは民衆暴動という伝統的反抗形態が、ある特定の局面でより明確で典型的な政治思想(民族主義あるいはイスラム復興主義)によって導かれた社会運動へと転換することである。言いかえれば、より下層レベルの社会的連帯意識が、特殊な歴史的条件のもとで、一気に「政治的」局面(あるいは「国家的」次元)に上昇してくる、という事態である。

こうした社会の基層レベルの社会紛争の政治化、という特殊現象を、1882年のアレキサンドリア反外国人「暴動」の局面に見出そうとしたコール(Juan Cole)の興味深い研究をここでは挙げておこう⁽¹²⁾。エジプトからインドに至る広い視野をもった比較史的研究の中で、コールは、オラービー運動と連動したアレキサンドリア都市民衆の「暴動」(1882年)を、セポイの反乱(1857～58年)と同じく、ヨーロッパ勢力が拡張した時代の初期に起こった反乱(エジプトの反ナポレオン暴動・インドのプラッシーの戦い)に続く、民族主義的な「第2次反乱」(the secondary revolt)と捉える。その場合、興味深いのは、ヨーロッパ資本主義の進出基地であるアレキサンドリア市において、当時、ほぼ日常的に起こっていた、外国人とエジプト人の労働者(「イタリア人・ギリシア人・マルタ人」対「エジプト人・ヌビア人」連合)の抗争(feud)が、オラービー運動の民族主義スローガンによって政治的方向づけを与えられた、とコールが分析している点である。すなわち、ethnic feudから、nationalist movementへの転換が起こったとするのである⁽¹³⁾。

この「転換」の局面の分析は、より実証的研究によって深められなければならない。そしてこうした作業の重要性は、70年代以降の中東における政治

変動の構図を知る人々にとって、容易に理解されるであろう。

しかし、ここで本稿が当面の目的としているのは、この「転換」（あるいは、誤解を与えやすい表現だが「政治化」）の局面以前の問題のレベル、すなわち、社会の基層レベルの日常的な社会行為を通じて表現される社会的連帯意識に関してである。

この点で、この序論の部分で言及しておきたいのが、前述の「都市の農村化」と呼ばれる現象をいわば「土着的な都市化」として把える視角である。すなわち、前出のアブー・ルゴットらの念頭にあったのは、この世界史的現象としての都市化に関し観察される次のような重層的構造であった。

それは、一方では、近代資本主義の「中心部」において生成し、また世界的資本主義体制の形成に伴い、「周辺部」へと「輸出」されていった普遍性をもつ都市化のパターンと、他方ではこうしたいわば「近代的な」都市化を随伴する近代経済部門に組みこまれない都市人口（しばしば、都市「雑」業層とか「インフォーマル」部門としてその経済活動がネガティブな形容詞を伴って分類されてきた）を吸収し膨張してゆくところに第三世界において顕著である「土着的な特徴をもつ都市化」という2つのパターンから成る重層的構造である。

この2つの「都市化」を、景観上区別する、すなわち居住空間における類型化をするなら、エジプトおよび多くの中東イスラム社会の場合、それは前述のとおり「^{シャールワ}街路」的構成と「^{ハーク}街区」的構成として区別されるであろう。しかし、この議論のより大きな論点は、都市化の過程（あるいは、農村社会と区別された「都市」の歴史的成立条件）を社会的分業の展開と結びつけようというあの古典的な議論である。そして、こうした議論は、必ずしも近代西洋の社会科学の独占物ではないことに、ここではとくに注意を促しておきたい。とくに、第二の土着的な都市化の過程を見る場合、これは避けて通れない論点となる。

多くの読者がすでに気づかれるとおり、こうした「土着的都市化」のパターンを中東イスラム社会において検出しようとする時、言及せざるを得ないのが、イブン・ハルドゥーン (Ibn Khaldūn) の「都市化」(taḥaddūrすなわち

「定住化」と社会的連帯（アサビーヤ‘aşabiya）意識の変容をめぐる有名なテーゼである⁽¹⁴⁾。

ゲルナー（Ernest Gellner）は、先に述べたように西洋近代の社会科学の独占物ではないこの議論を、デュルケームに先行して、イブン・ハルドゥーンが行っていたことをめぐり問題提起的な論文を発表している⁽¹⁵⁾。この論文でゲルナーは、都市化（すなわち，badaw〔農村・遊牧〕的生活からḥaḍar〔都市〕的生活への移行）は社会的連帯（アサビーヤ）の解体をもたらすというイブン・ハルドゥーンの周知の王朝交替の基礎理論と、一見これとは正反対の結論を導き出しているデュルケームの議論を対置させている。

これもまたよく知られている後者のデュルケームのテーゼは、伝統社会における「機械的連帯」（mechanical solidarity その典型のひとつは北アフリカの遊牧民社会の事例に求められている）より、近代資本主義社会における社会的分業の発展に支えられた「有機的連帯」（organic solidarity）の方が社会的連帯の強度がより大きい、というものである⁽¹⁶⁾。

その場合、デュルケームとイブン・ハルドゥーンの議論の組み立て方の共通点は、社会的連帯という道徳的現象の変化を社会的分業の展開と重ね合わせて論じている点にある。そして、両者が想定する社会的分業の展開のあり方の相違が、それぞれの社会の空間的表現とも扱えられる都市化のあり方を規定しているわけである。

もちろん、両者の議論を直接的に比較することに問題がないわけではない。たとえば、イブン・ハルドゥーンは、歴史的にきわめて特殊な性格をもつ近代資本主義的な社会的分業について当然のことながら無知であった。他方、デュルケームの議論も、社会的連帯の「強度」（それが「測定」可能なものかどうかという議論は別として）の増大を何らかの単一指標の量的拡大と把える近代主義者にありがちな定式を用いている点で批判を受けるだろう。

したがって、両者の社会的分業と社会的連帯意識に関する議論を、同一の次元に置いて、前述の「2つの都市化」の図式にそれぞれ平行的に当てはめるわけにはゆかない。いうまでもなく、今日の第三世界における「土着的な

都市化」(もしそのようなものがあるとしたら)は、近代資本主義の世界的拡大の中で生まれ、かつこれと共生しているからである。

さらに付け加えて言うならば、「土着的な都市化」の発生する社会空間は、よく言われるような都市流入民が近代資本主義的な都市的生活様式に適應するために準備を行うクッションあるいは緩衝帯として機能しているだけではない。今日の第三世界における資本主義の発展は、しばしば指摘されるように土着的な都市化あるいはインフォーマル・セクターの成長といった諸現象を必然的に生み出し、そこにおけるいわゆる「非資本主義的」諸関係と「接合」しているからである。

以上の点を念頭に置いた上で、はじめてイブン・ハルドゥーン¹⁷の提示する都市化の伝統的様式、すなわち特殊な社会的分業と社会的連帯^{アサビヤ}の組み合わせのあり方をどう積極的に現代社会分析に活用してゆくかを議論することが可能になる。ただし、本稿の目的は、そのような理論的問題に対し何らかの貢献を試みることではない。すなわちたとえばゲルナーの指摘を待つまでもなく、イブン・ハルドゥーンの研究を如何に現代社会科学に再生させてゆくかは、これまで多くのアラブ人社会学者の最大の理論的関心事となり、もとよりここで整理できないほどの多様な議論が行われている¹⁷。そして、こうした研究は、同時に実証史家による歴史的分析和相伴い、補強されて発展してゆくだろう。たとえばそこでは、ホーラーニー (Albert Hourani) が問題提起している「都市的アサビヤ」(urban 'aṣābiya)の諸形態が議論されることになるのかもしれない¹⁸。

2. 分析の素材とその空間的設定

むしろ、本稿の目的は、以上に述べた「都市化と社会的連帯」をめぐる問題状況を把握する具体的な分析素材を提示することにある。ここで本稿が取り上げるのは以下の二人のエジプト人研究者の手になる社会調査報告である。この2つの事例の間にある社会的空間の差異とそれに密接な関係をもつ社会

的連帯の表象について本稿の主要な関心を払いたい。

(1) Abū Zayd, Aḥmad, *al-tha'r dirāsa anthrūpūlūjīya bi-ihdā qurā al-ṣa'id* [サアル：上エジプト一農村の人類学的研究], Cairo, National Center of Social and Criminological Research, 1965.

(2) Ghānim, 'Abdullah 'Abd al-Ghanī, *hijra al-aydī al-'āmila dirāsa al-anthrūpūlūjīya al-ijtimā'īya li-l-binā' li-mujtama' al-ḥammālīn bi-mīnā' al-iskandarīya* (労働力の移動：アレキサンドリア市港湾労働者社会の社会構造に関する社会人類学的研究), Alexandria, al-Maktab al-Jāmi'ī al-Ḥadīth, 1982.

この2つの事例研究が対象とする上エジプト農村とアレキサンドリア市港湾労働者社会という2つの社会的空間を比較すると、そこには、連続性をもった差異あるいは変化が見られる。この変化を、本稿では先に述べた「土着的な都市化」の過程として扱えたいと考える。その場合、この変化の過程の中心的内容が、社会的連帯の性格をめぐる問題であることは、イブン・ハルドゥーンとデュルケームの2つのテーゼの比較の箇所ですでに説明したとおりである。

しかし、デュルケームの考えに従うなら、「社会的連帯はまったく道徳的な現象であるから、そのこと自体によって、厳密な観察をもその測定をも受けつけない。したがって、その分類と比較を行うためには、われわれの見落としがちな内在的事実に代って、これを象徴する外在的事実をおき、後者と前者を研究しなければならない」⁽¹⁹⁾。

周知のように、デュルケームはこの「外在的事実」の素材として、^{サンクシオン}制裁的特質をもつ「法」という現象を取り上げその類型分析を展開している。これに対して、本稿では、「機械的連帯」の表象として彼が否定的な評価を下している「法」現象の一類型、feudと呼ばれる集団的な復讐慣行に注目したいと考えている。

すなわち、本稿で取り上げる2つの社会調査は、アラブ社会においてサアル (tha'r; 口語では一般にタールと発音) と呼ばれるこの feud 慣行について、

興味深い研究素材を提供している。そして、重要なのはこの社会的空間を異にする2つの調査事例における feud 慣行の差異が、土着的都市化における社会的連帯の性格変化を象徴する外在的事実と捉えられることである。

ところで、以下の議論を行う場合に、まず注意しなければならないのは、この feud という現象をめぐって、よくありがちな文化的偏見を排除することである。たとえば、feud は、デュルケームが表現したように「低級な種に属している」後進的社会においては、「不条理な破壊欲」や「知性を欠いた激情的な動き」が支配的であって、こうした「復讐の感情が…まったくはるか遠くまでおちまけられる」といった現象ではない⁽²⁰⁾。また、急速な社会の「近代化」の中で取り残された「伝統的」価値が引き起こす社会的病理現象と捉えるだけで済む問題ではない。

この feud をめぐる理論的問題についても、本稿ではその詳しい解説は行わないが、ピーターズ (E.L. Peters) による実証研究とその問題提起を引き継ぎこれを理論的に発展させたブラック・ミコード (Jacob Black=Michaud) の研究が、この分野ではスタンダードな議論の土台を用意していることだけは指摘しておかなければならない⁽²¹⁾。本稿の議論もブラック・ミコード等の理論研究をふまえて展開するものである。

さて、この「序論」を締めくくるにあたって、前掲の2つの事例研究の舞台となる上エジプト農村とアレキサンドリアという2つの地域、そしてとくに労働力移動という媒介項を介して結ばれる両者の関係が、冒頭に述べた近代エジプトにおける資本主義発展の構造の中でどのように位置づけられるのか付言しておきたい。

アレキサンドリアは、第3節でまたふれるように近代エジプトに形成された棉花輸出経済のいわば「搾乳器」として発展した都市であった。同じ東アラブ地域のバイルートと同様、世界資本主義の「中心部」に隣接した東地中海商業圏の主要都市として、そして「中心部」の基幹産業である綿工業に対する棉花の輸出港としていわば、「植民地主義の橋頭堡」(Reimer)として「周辺部的都市化」(Chainchian)が進展した都市であった⁽²²⁾。そこでは、カイロ

でアブー・ルゴッドが発見した2つの都市化と同様の社会的景観をとる2つの都市空間が、文化的緊張をもって並立する「植民地都市に特有の社会空間的分割 (sociospatical fragmentation)」⁽²³⁾が形成され、前述のようにこの日常的緊張が民族主義運動へと政治化する舞台となったのである。

一方これに対し、上エジプト農村は、近代のエジプト棉花経済の発展の影の部分²⁴を代表する存在であった。エジプトが世界資本主義システムに包摂される過程を通じて、上エジプトは遠隔地交易やオスマン帝国域内の分業関係の中で作り上げてきた自立的な経済基盤を失った⁽²⁴⁾。そしてさらに、ベイスン灌漑の通年水路灌漑への移行によって棉花生産が飛躍的に拡大した北部のナイル・デルタ（下エジプト）とは対照的に、開発から取り残され、過剰労働力が滞留する地域となった。これらの過剰労働力は、季節的な移動労働者（タラーヒール）としてデルタの棉花生産システムに有機的に組み込まれる一方、さらにカイロやスエズ運河沿岸都市（ポート・サイド、イスマイリーヤ、スエズ各市）、そしてアレキサンドリアへと流入してゆくことになる。

本稿は、上エジプト農民が故郷の村と出稼ぎ先（この場合は港湾労働）の社会の双方で取り結ぶ社会的連帯のあり様、その比較について幾つかのデータを示そうとするものである。言うまでもなく、こうしたテーマの追求は冒頭で述べた今日における労働力移動の国際的局面での分析に何らか資するところもあると考える。

第2節 上エジプト農村とサアル (feud) 慣行

本節では、前に挙げたアハマド・アブー・ザイドの『サアルー上エジプト一農村の人類学的研究』を取り上げる。この調査事例の紹介に入る前に、上エジプト (Şa'īd) および上エジプト人 (Şa'īdī, pl. Şa'āyida) について若干の解説を加えておこう。

〔上エジプトの地域的特徴〕

すでに述べたように、今日の上エジプトは、近代エジプトの不均衡な経済発展が作り出した「低開発」地域としての特徴をもつ。これに対し、近代以前の上エジプトは、アラビア半島に小麦を輸出する一方、シリアから輸入した棉花を加工して綿布などをスーダン他に輸出するという前近代の交易体系の中の自立した結節点として機能していた。それが19世紀以降、一部のサトウキビ・プランテーションを例外として、商業的農業の発展から取り残され、同時に手工業生産もヨーロッパ製品の流入によって破壊され「低開発化」が急速に進行したのである。こうした「低開発性」のエコロジカルな条件は、デルタで棉花の拡大とともに進行していた通年水路灌漑の普及の遅れに示されている。そして、上エジプトは、デルタの輸出用棉花生産のための労働力（タラーヒール労働者）供給基地として、近代エジプト経済の再生産構造の中に位置づけられてゆくことになる。

しかし、上エジプトにはこうした近代的な経済発展が作り出した「低開発性」とは異なった、（しかし、しばしばこれと結びつけて論じられる）もうひとつの社会的特徴がある。それは、下エジプトのデルタと違う地理的条件、すなわち砂漠との近接性から生まれ出る特徴とも考えられる。この砂漠との近接性とは、具体的には、遊牧民社会との接触の強さ、そしてアラビア半島との交易や人口移動を通じた文化的結び付きによって説明される。たとえば、今日の上エジプト人は、下エジプトなどより、相対的にアラブの血統意識が強いことで知られる。しかし、この特徴が、前近代のこの地域の歴史発展の結果の継承によるものか、あるいは近代におけるデルタ社会の「発展」に対する相対的な「後進性」なのか、ここでは明確に答えることはできない。たとえば、村の景観ひとつとっても次のような問題がある。すなわち、上エジプトの砂漠とナイル川農地の境界線に沿い鎖状に伸びる村々が、高い壁で囲われた大きな家からなる防衛性の高い建築様式をとっているのは、むしろ北アフリカなどエジプト以外の地域の村と似ているというべきなのかもしれない。

しかしながら興味深いのは、下エジプトのナイル・デルタの農村もまた、18世紀には同様の景観をとっていたといわれることである⁽²⁵⁾。

このような歴史的背景にまつわる問題は、別の研究に譲るとして、ここでは上エジプト社会が、下エジプト、とくにカイロなどの「中心部」から「周辺」として位置づけられ、また前者からは区別された文化的特徴をもっているということだけを確認しておこう。たとえば「世界の母」(umm al-dunyā)なるカイロから、「辺境人」の上エジプト人の気質がどのようにとらえられてきたかについて、われわれは、典型的な表現を、アハマド・アミン(Aḥmad Amin)の『慣習伝統事典』(qāmūs al-'ādāt wa al-taqālīd)の中に見出すことができる⁽²⁶⁾。

同書の「上エジプト人(al-ṣa'āyida)の項」では以下のように述べられている。

「彼らは南部(al-wajh al-qibli)の住民であり、勤労における忍耐と力の強さをもつことで知られる。彼らは多くがカイロやアレキサンドリアなどの都市に出稼ぎをして住宅や大きなビルの建設の激しい仕事をその肩に担う人々である。また彼らの中には、果物などを取扱う行商人(al-bā'a al-mutajawwila)として働く者も多い。

彼らは、身内の女性に対する激しい防衛心(al-ghayra)⁽²⁷⁾をもつ。また、彼ら以外の者に対して団結して連帯すること(al-ta'aṣṣub)が多い⁽²⁸⁾。これはとくにアズハル大学周囲の学生たちの間でもっとも激しい様相を呈する。すなわち、下エジプト人(baḥrāwī)が上エジプト人に危害を加える時には、彼らは団結連帯し、〔前者も〕同じく連帯するからである。

彼らは親切さ(al-karam)において下エジプト人より優っていることで有名である。来客があった時には、最大限の親切さで歓待する。しかし同時に、彼らは行動(al-mu'āmala)の激しさでも知られ人々に恐れられている。—中略—

また、おそらく彼らの方がエジプト人の血を下エジプト人よりより明白に受けついでいる。これは、彼らと他所の人々との混交が少ないためであろう。—中略—

彼らは自らの手で政府に陳情する (shakwā) ためにサアルを行うことを好む。長い年月の間、彼らはひたすらサアルの要求を隠し、それが実現可能となるまでそうしているのである。そして、時がいたると醜悪の極みとも言える身の毛もよだつ事件を引き起こす。その原因の多くは、女性についての嫉妬心^{イラ}、農地や家畜に対する侵害である。—中略—

彼らの国の端には、多くの遊牧民が住んでおり、彼らの性格 (akhlāq, あるいは道徳感情) も遊牧民の影響を受けており、また逆もそうである。」

アミンがここで述べている上エジプト人の気質、とりわけサアルにおける行動様式の特徴は、本節で以下に紹介するアハマド・アブー・ザイドの調査の背景をなすものであった。

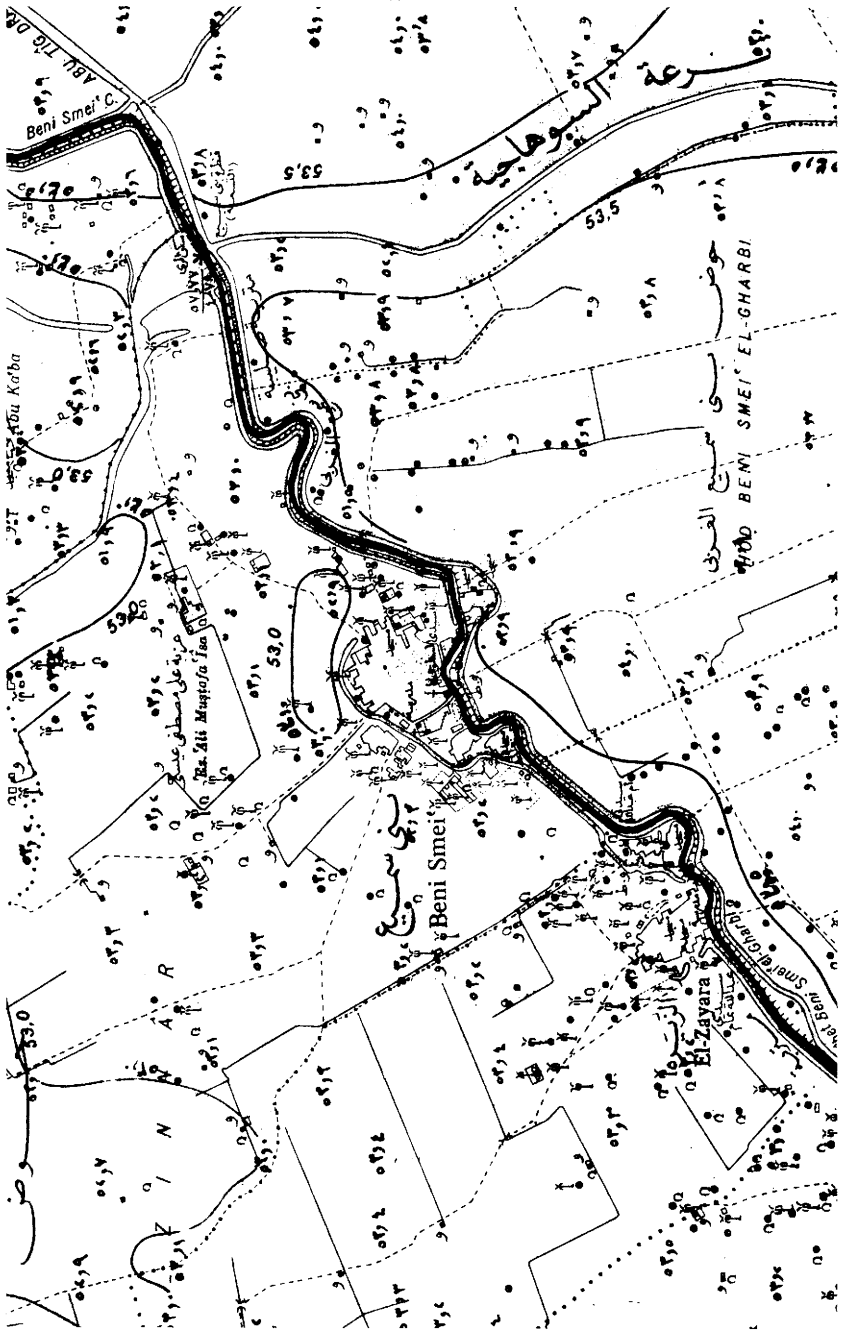
〔調査の動機と調査村の一般的特徴〕

アブー・ザイドによる調査の背景には、上エジプトにおけるサアル殺人の頻発性に関する政府の政策的関心があった⁽²⁹⁾。すなわち、全国の犯罪統計における上エジプトのサアル殺人の特異な位置は、1952年革命後の政府が社会開発への関心の高さに基づいて設立した国立社会学犯罪学研究所 (al-Markaz al-Qawmī li-l-Buḥūth al-Ijtimā'īya wa al-Jinā'īya) が、アブー・ザイドに調査を依頼する際の直接的動機をなしたと考えられる⁽³⁰⁾。

調査村であるバニー・スイミーウ (Banī Simī') 村は、サアル殺人が多発するアスユート県の中から、比較的少ない人口・良好な治安状態・村落社会の同質性 (mutajānasa) などの基準で選定された (Abū Zayd 前掲書 p.14)。同村の人口は、約8000人、村に帰属する土地は2500フェッダーン (1フェッダーン=約0.42ha.)、ナイルの西岸に位置し、県都アスユートから南に約30km、アブー・ティエグ (Abū Tīj) 郡に属する (p.24, 図1を参照)。

同村は、親村と4つの子村 (nazlāt)⁽³¹⁾から成り、村民のほぼ半数が親村に居住し、子村は親村の行政区 (nāhiya) に帰属する。子村の形成要因は、①人口の自然的増大 (とくに親村から遠い農地の耕作と夜警のため、親族集団の一部が移住) と、②政治的要因 (親族集団相互の抗争の激化とサアルへの恐怖のための

第 1 図



逃避)である(p.26)。それゆえ、個々の子村は、同一の経済的利益をもつと同時にサールの実行・防衛という政治的単位としても機能している(p.27)。

この子村における経済的・政治的(とくにサール実行・防衛の)単位としての特徴は、その居住における集合性(al-takattul al-makāni)によって示されるが、こうした「集住性」こそは、バニー・スィミーウ村の最も重要な特徴である(p.28)。この特徴は、親村の居住区構成にも同様に見出される。

親村の居住区は、これをモデル化した図2に示すように、村の草分け(aṣṣ al-balad)である人物の廟(ḡarīkh)を中心に、放射線上に分割される街区キスムから構成される。そしてそれぞれの街区が村内の親族集団の単位に結びつくと同時に、個々の街区の内部の住居構成も、親族の等級(darja)原則にもとづいて配置されているという特徴がある(p.28)⁽³²⁾。こうした親族制度の核(nawāh)となるのが父系大家族(al-'ā'ila al-abawīya al-mumtadda)であり、これは生産と消費の共同的単位であると同時にサールを実行する政治制度の核となる(p.29)。

[サール発生の経済的・生態学的条件]

サールの発生は、以上に述べた居住形態の集合性に反映される、村内部の親族制度と結びつくものである。しかし、これを次項以降で述べる前に、サール発生と当該社会の経済的・物理的・生態学的条件がどのように関連しているのか(p.23)について見ておく必要がある。すなわち、こうした諸条件とサールとの関係を考えることは、従来サールに関する調査がなされた砂漠の遊牧民の事例や、次節で述べる都市空間におけるサール発生などと比較する意味でも重要だからである。「序論」の中で述べておいたように、それは社会的連帯意識の変化を、物理的条件が作り出す社会的分業形態や生業の形態との関連で分析する素材を提供するからである。

アブー・ザイドがこうしたサール発生の経済的・生業学的条件としてあげるのは、①ベイスン灌漑による農業生産様式と、②分散の小規模土地所有にまとめられる。ベイスン灌漑は、周知のとおりナイル川の自然氾濫(7月中旬

～10月)を利用して、堤防によって囲まれた耕地(ベイスン; ḥawḍ)に湛水し灌漑を行う古代エジプト以来の灌漑様式であった。

サアルの原因となる社会的紛争は、第1に、氾濫水が引いて耕作が開始される時期に、耕地の境界線をめぐって発生するものであった。村のベイスン耕地は、細かく分割所有されており、氾濫により境界線を定めた目印の白い石が動くということから紛争が生じたという(p.32)。また、分散的小土地所有は、これを所有する親族集団および個人の社会的地位を互いに非常に似かよったものとする⁽³³⁾。そのためこの村の中には社会的経済的格差がなく、その結果、人々は権力(sayṭara)に容易に服属せず男気(rujūla)を強調する。これらの条件がサアルの実行と長期的継続を支える要因だ、とアブー・ザイドは主張する(pp.30-31)。

その他、この村ではナイル川の増水期に、運河(tur'a)沿いに揚水機(makīnāt)を設置して、換金作物である棉花を堤防沿いの耕地に栽培するが、この揚水機が接近して設置されることが紛争の原因となる(p.31)。加えて、ナイルの増水期は、一般に農閑期となり、出稼ぎや漁業を行う者以外は、村の茶屋(maqāhī al-balad, al-ghuraz)で時間をつぶすが、これもサアルの原因となる(p.35)。

以上のアブー・ザイドが指摘するサアル発生の経済的・生態学的条件の中で重要なポイントは、ベイスン灌漑の下での特殊な農業生産様式における土地所有と農業経営(あるいは労働組織)の単位に関する議論である。彼は、これらの単位が、サアル実行の政治単位と重なり合うことを暗示しているが、これを具体的データで示していない。後者の単位については、次項以降の親族組織の調査結果を提示しているだけに残念である。ここでむしろ調査者は分散的小土地所有に起因する個々人の類似性・同質性が「機械的連帯」を生むというあのテーゼに接近しているように見える。

[サアルの社会的単位]

村内の最小の政治的単位、すなわちサアル実行の単位は、バダナ(badana)；

「嗣」の意味をもつ。同様に身体用語を用いた親族集団の corporate identity を示す言葉はアラブ社会で多く見られる) と呼ばれる父系親族集団である。結束性 (tarābuṭ) と凝集性 (tamāsuk) と連帯性 (ittiḥād) という特徴をもつバダナは、次のような構成原理の特質がある。それは、①内部分裂の存在にもかかわらず外部に対して統一的 (mutakāmila) な単位となること、②男性の優位 (taghlīb al-dhakar), あるいは男系出自 (intisāb fi khaṭṭ al-dhukūr) の優位性、そして③年齢階梯原理 (mabda' al-tafāwut al-sinn) である (p.37)。

村内の親族集団は以上の原理に従って、①ウスラ (al-usra; 両親と未婚の子供達からなる最小の親族・居住単位)、②アーイラ (al-'ā'ila; 三世代に及ぶ大家族)、③小バダナ (al-badana al-ṣuḡhrā; 四・五世代の父系の出自 nisba がたどれる親族集団)、④大バダナ (al-badana al-kubrā; 最大限の遠い世代から出自がたどれる集団) の四段階に区分される (p.39)。

以上に述べた村の親族構成の原理を貫くのは、男性優位の価値観にもとづく父系出自の原則であり、それは勇氣 (shajā'a)こそ男気の価値と考えるサアル実行の行動規範を形づくるものである。また、年齢階梯原理は、長老 (kibār al-sinn) や家 (bayt) やアーイラの長のもつ権威 (murjī') の源泉となり、とくにサアルの調停 (ṣulḥ) や和平交渉 (mufāwāḍa) を行うバダナ会議 (majālis al-badana) を有効に機能させる (p.40)。

以上の親族構成の原理にもとづき、バニー・スィミーウ村は、4つの系統とそれ以外の社会的地位を異にするグループから構成される。それは、①主流バダナ集団、②傍流バダナ集団、③小親族集団、④キリスト教徒である。

まず、第1の主流バダナ集団は、エジプトがイスラム化された時期にアラビア半島から渡来したという村の草分け、シャイフ・アリー・アル・フィール (Shaykh 'Alī al-Fīl) の4人の息子を始祖とする4つの大バダナから構成される。この4つの大バダナは、16の小バダナに、さらに多くのアーイラ、そしてウスラへと分かれる。ここで言うウスラは、小家族としての意味と同時に、サアルの戦闘員である成年男子の数を示すが、そのウスラの数は、この4大バダナ全体で1703を数える (pp.42-43)。

第2は、以上のシャイフ・アリー・アル・フィール系列以外のバダナ集団であり、さまざまな理由で村に外から入り定住したグループであり、主流派バダナの幾つかとそれぞれ姻戚関係を結んでいる。これらは、13の小バダナ、そして835のウスラから成る。これらのバダナの中には、増水期の漁業や農業の賃仕事に携わり経済的地位は低いが、その強力な戦闘力で恐れられるバダナや、スエズ運河工事期に強制労働を忌避してこの村まで逃亡してきたバダナなどが含まれる (pp.43-44)。

第3は、バダナという父系出自集団を構成できない小規模親族集団からなるグループである。彼らは社会的地位が低く、大きなバダナ集団に保護 (al-ḥimāya) と庇護 (al-ri'āya) を求め、この周囲を取り巻いている (iltifāf) (p.44)。

最後が、キリスト教徒アーイラである。彼らは、約400名で12のアーイラから構成される (したがって、1アーイラ平均33名の規模)。また、彼らは教育水準も経済的地位も高いが、しかし村の社会的階梯 (sullam) の最も低い地位を占める。すなわち、彼らはサアル行為に直接参加することができず、その成員が殺される時には、庇護関係をもつムスリムのバダナに代行を依頼する。そして、この庇護を行うムスリムのバダナは、自らを「キリスト教徒アーイラのアラブ」 ('arab al-'ā'ila al-masīḥiyya) と呼ぶ。すなわち、村のキリスト教徒400人は、それぞれの保護者である「アラブ」をもつわけである (p.45)。

以上のアブー・ザイドの調査報告で注目されるのが、③の小親族集団と④のキリスト教徒アーイラがバダナ集団とそれぞれ結ぶ庇護的關係である。前者の集団は、筆者自身の上エジプト農村での見聞によれば、ハワーシー・バラド (ḥawāshī al-balad)、直訳すれば「村を囲む者たち」と呼ばれる土地なしの農業労働者でやはり大親族集団を形成できないグループにあたると思われる。この場合の取り囲む者 (ハワーシー) と、バダナを取り巻く (イルティファーフ) という2つの表現が共に似かよっているところが興味深い。

さて、後者のキリスト教徒が戦闘行為を村内で禁じられている状況につい

て言うならば、他の同様の事例を筆者は知らない。しかしこれは、いわば、ズインミー的關係の村落内における再生産という意味で、イスラム史研究のコンテキストでも興味深いし、また現代の都市化に伴うムスリム・コプト關係の変化を研究する上でも重要な論点を提供するものだと考えられる⁽³⁴⁾。

〔サアルの法（カーヌーン）と連合・庇護關係の形成〕

ここでサアルの法（カーヌーン qānūn）と呼ばれるものは、實際、慣習法（'āda）と把えるべきものである⁽³⁵⁾。

アブー・ザイドは、同村の調査からサアルの「法」について次のような原則を指摘する。

第1は、バダナの連帯責任（mas'ūliya ḍamaniya）である。「戦いはバダナ、血はベイト」（al-ma'raka badanāt wa al-damm buyūt）という言葉で示されるように、殺された人間に対する感情は、もちろん小親族単位（ベイト）の成員の間のほうが強いが、しかしサアルの義務は、彼が属するバダナの全成員にただちに波及する。同様のことは加害者のバダナにも言える（pp.48—49）。

第2は、均等原則（損失 khasāra の均等）、すなわち同害報復である。このサアル単位、バダナ集団単位の間における殺害者の数の均衡をはかるやり方は、ちょうど金銭の貸借關係に似ているし、事実借金（dayn）にまつわる言葉が用いられる（p.51）⁽³⁶⁾。アブー・ザイドは、このような計算を可能にするのは、前述のとおり零細土地所有により村民間に経済的地位の格差がなく、また、主流派バダナ集団内部のように同一の出自を有する成員の間には社会的地位の格差もないからだと述べる（p.51）。ただ、この均等原則は、アーイラの長（rabb）が殺された場合は必ずしも適用されないし、また反対に庇護關係にあるキリスト教徒が殺された場合、バダナ集団間の殺害者の数に計算されないということがある。後述するようにこれらは、サアルを長期に継続させる原因となる（pp.50—51）。

第3は、連合（laff）、庇護（ḥimāya）關係の形成である。前項で述べた村

内の親族集団間の勢力の不均衡は、サアルの発生に対し、とくに力の弱い(すなわち、成人男子の戦闘員の少ない)幾つかの小親族集団がひとつのバダナの回りを取り巻く関係の形成を促すことになる。これが連合(ラッフ、直訳すれば「巻き」)関係である。この「連合」は、安定的な数世代に及ぶものと、偶発的・一時的な戦略的目的で結ばれるものがある。前者の場合は、姻戚(muṣāhara)関係によるものと、保護(ヒマーヤ)の供与の義務(milḥa)を求めものがある⁽³⁷⁾。

以上の原則にもとづいて展開するサアルは、実際には村内の有力大バダナを中心に結成された連合・庇護関係を取り結ぶ集団の間で発生する。そして、このサアルは、前述したような諸要因で長期化する。それは、ブラック・ミコードが指摘するように、サアルが社会的連帯意識をもった2つの集団相互で長期にわたって継続する社会関係そのものを表現しているからに他ならない。

アブー・ザイドが、このような長期化した継続的なサアルの実例としてあげるのは、以下の例である。それは、1940年と58年に断続的に発生したサアルの応酬関係であり、主流派大バダナであるHバダナとTバダナの間で行われたものである。Hバダナと連合関係にあるAバダナが、Tバダナを「アラブ」として庇護関係にあるキリスト教徒のBアーイラの成員一人を殺害したことに始まるこのサアルの連鎖は、その後Hバダナと連合関係にあるKアーイラとAアーイラ、Tバダナに従属(mawālī)関係を結んだWアーイラのメンバーを巻き込んで拡大し、当時Hバダナ側で4名、Tバダナ側で6名の死者が出た。この抗争は当局の介入と他のバダナによる調停(スルフ)でTバダナが賠償金を受けとりしぶしぶ承服することで終結した。しかし、キリスト教徒の死者の計算をめぐって均等原則にもとづく怨恨は継続し1958年になって再び両者のサアルの応酬が始まり、今度はHバダナ側に6名、Tバダナ側に5名の被害者が出た(pp.55-58)。

この両バダナの抗争激化において問題になったのは、抗争の最終局面になってHバダナに属する少年がサアルの犠牲になったことであり、加えてこれ

に怒ったHバダナがTバダナの女たちを侮辱する行為に出たことである。これは、当事者の両バダナのみならず村社会全体から異常な事件として非難されることになった。なぜなら、これらの行為は、サルにおけるウルフ(‘urf; 慣行)を著しく逸脱するものであったからである (pp.58—59, 63)。

〔サル慣行の背後にあるもの〕

ここで述べられたウルフは、通常用語法によると、国家法(カーヌーン)に対する慣習法を意味する言葉であるが、ここでの使用法は、むしろカーヌーンの付則あるいは補則として、サル実行における禁忌とされる事柄を示したものと見えようである⁽³⁸⁾。さらに、アブー・ザイドは、サル慣行の表の論理(カーヌーン)を下支えするものとしてウルフを捉えているようにも見える。

このサルにおけるウルフの主要な内容は、女性や年少者には危害を加えない(‘adam al-ta’arruḍ; すなわち「イルド」<‘irḍ>を犯さない)というものであり、これを逸脱することは冒瀆(kafir)であり恥辱(‘ār)であると考えられる(p.62)。こうしたウルフを支える感情は、前述の「男性の優位」原則から派生するものであるが、このようなウルフは、とくに姻戚関係を結ぶ親族集団間のサルにおいて発現される。たとえば、妻の実家の者が夫およびその一族の者に危害を加えた場合、彼女の安全は保障される。たとえ、夫が実家の者に殺されても、彼女に子供がいればすべて夫のアーイラの一員として保護されるし、子供がいなくても危害を加えられることなく実家に戻ることが許される(pp.59—60)。ただし、息子が実家の者に殺された時は、妻は夫のアーイラの側について実家の者に対するサルを求める。アブー・ザイドは、これを姻戚関係に対して父系親族紐帯(rawābiṭ al-qarāba al-‘aṣība)が優位に立つことを示すものだとしている(p.61)。

以上の例に見るように、ウルフは男性優位の社会的価値観と分かち難く結びついている。この価値意識こそ、サル実行の形で表現される親族集団の社会的連帯(アサビーヤ)の基盤となるものである⁽³⁹⁾。そして、こうしたアサ

バ原理と結びついたウルフは、個々のアサバ親族集団の連帯を超えた村社会全体の秩序（誤解を恐れずに言えば共同体的秩序）を護るものではなかったかと筆者は考える。というのも、これとよく似たウルフの性格はアブー・ザイドがウルフのもうひとつの原則としてあげる以下の原則にも同様に看取できるからである。

すなわち、サアルの実行において、その攻撃対象が人間以外に向けられた場合、それは同じく恥辱（アール）と考えられる。たとえば、揚水機の破壊や家畜の毒殺、収穫物の焼打ちなどに対する禁忌である。アブー・ザイドは、このウルフを、女性や年少者のサアル対象からの除外（tajnib）と同様、男気^{ルジューブ}の強調にもとづくものだと指摘している（pp.31-32）。

以上に述べたサアルのカーヌーンとウルフの構造をふまえた上で、アブー・ザイドは、サアル慣行を次のように考える。すなわちサアルとは、かつて行われた攻撃に対する復讐や報復を満たすための無目的な（‘ashwā’ī）殺人の犯罪ではない。それは、基本的なとくに法律的特徴をもった集合的な社会制度である（p.63）。したがって、サアル慣行それ自体は、決して病理的な社会現象ということとはできない。むしろ、病理的な事態があるとしたら、前述したような長期化したサアルがウルフの侵害という村社会の再生産を脅すほどに過激化した場合について言えることであろう。ただし、アブー・ザイドは、このようなサアルの変化の背景をなす村落社会の変容について、とくに注目すべきデータを提示してはいない。

第3節 アレキサンドリア市港湾労働者の社会

〔アレキサンドリア市への上エジプト人の流入〕

「序論」で述べたように棉花輸出経済の「搾乳器」アレキサンドリアは、典型的な植民地型都市として成長した。そしてこのアレキサンドリアの瀾熟した繁栄ぶりを、活々と写し出した文学作品としてローレンス・ダレル（Lawrence Durrell）の有名な長編小説『アレキサンドリア・カルテット』がある。この

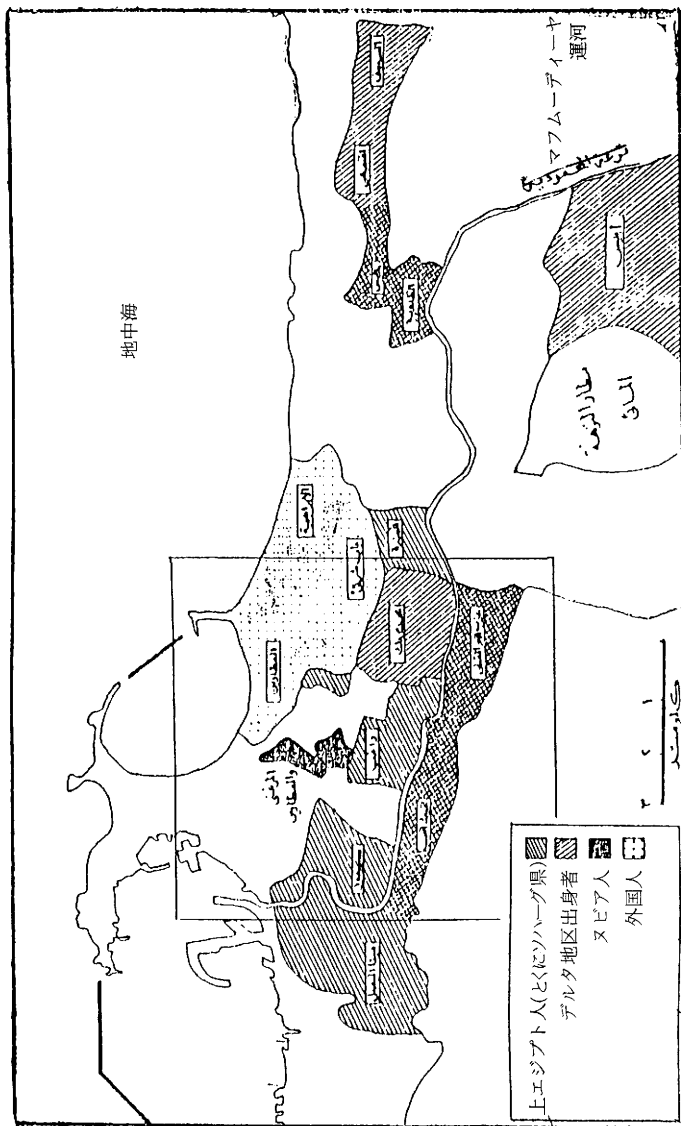
小説の中の表現を借りるなら、「この都市〔アレキサンドリア〕は打ち寄せるアフリカの暗黒の波を押し戻す堰堤のように作られた」「アジア的ヨーロッパの首都」であり、また「銀行家と棉花の空想的投機家たちのヘレニズムの首都」であった⁽⁴⁰⁾。

しかし、1952年革命以後、民族主義の嵐の中でアレキサンドリア市の相貌は激変した。ダレルは、彼の小説と並びアレキサンドリア市を素材にとった名著とされるフォースター (E.M. Forster) の『アレキサンドリアー歴史と案内』(*Alexandria—a History and a Guide*) の復刻版に寄せた序文の中でこの変容ぶりを怒りを込めて皮肉っている。彼曰く、かつて5カ国語が自由に飛び交ったコスモポリタンなその都市は、共産主義にかぶれたナセルのために致命的な影響を被り、今やアレキサンドリアはエジプト第2の都市というあまり気の進まない役割を演じているのにすぎない。かつてカフェの看板やポスター等を飾った華やかなヨーロッパ各国語の文字は、すべてアラビア語に書き変えられてしまった、と⁽⁴¹⁾。

このようなアレキサンドリア市の変容は、ひとつにはダレルの言うように、ナセルによる民族主義的経済政策(とくに植民地型金融流通機構の解体)の影響によるものであるが⁽⁴²⁾、もうひとつは彼の言う「アフリカの暗黒の波」、別の箇所の表現を借りれば「アラブの潮、ムスリムの潮」⁽⁴³⁾がこの都市により激しく打ち寄せてきたためであった。そして、この「暗黒の波」の主流をなした人々こそ、上エジプト農村出身者に他ならない。この上エジプト人の流入がアレキサンドリア市における「都市の農村化」あるいは「土着的な都市化」のパターン形成の主因をなしたのである。

1960年人口センサスによると、アレキサンドリア市への流入人口43万人のうち、500km以上も離れた上エジプト4県の出身者が31.9%を占め、その中でアス्यूト県出身者が5.9%、ソハーグ県が14.8%であった⁽⁴⁴⁾。そして、これらの上エジプト出身者は、特定の地区に集住することでも知られている。たとえば、カルモーズ区の全人口のうち、34.6%が上エジプトからの移住者、ラッバーン区は22.6%、マハッラムベイ区は25.4%などである⁽⁴⁵⁾。

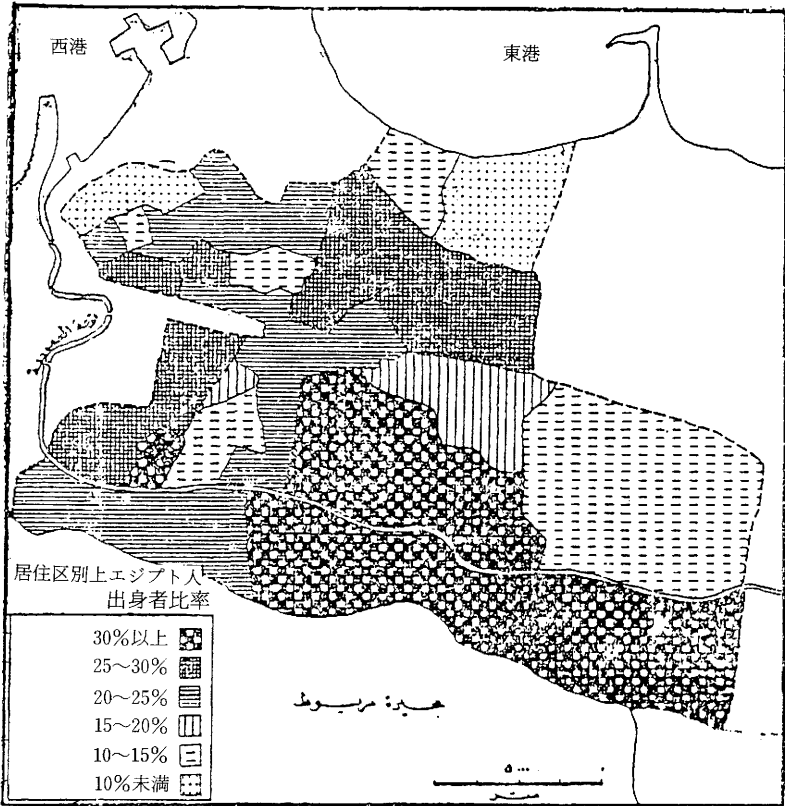
第3図 アレキサンドリア市への流入者の居住区



(注) □は第4図の範囲。

(出所) Abū 'Iyāna, Faṭḥī, *sukkhān al-iskandarīya*, Alexandria, Mu'assasa al-Thaqāfa al-Jāmi'iya, 1980, p.555.

第4図 上エジプト人の居住区別集住度



(出所) 第3図に同じ。p.551.

すなわちこれらの地区に集住した上エジプト人は、先住者をしだいに追い出して「上エジプト人の街区」(hāra al-ṣa‘āyida) をつくり出していったのである。第3図は、上エジプト出身者、下エジプト出身者、ヌビア人、外国人の主たる居住地区を図示したものである。この図から上エジプト人の多くが、マフムディーヤ運河沿いのスラム化した居住区を中心に住みついていることがわかるであろう。これは上エジプト人流入人口比を示した第4図によってさらに明白に表現されている。

そして、こうした居住区に集住する上エジプト出身者は、しばしば特定の職業に集団的に就業することでも知られる。たとえば、カイロ在住の上エジプト人について言えばゴミ収集業者 (al-zibbālīn) や「青果物のマフィア」を組織化している青果商などの例があげられる⁽⁴⁶⁾。そして、このアレキサンドリア市の場合、上エジプト人が集中的に就業する代表的職業は、港湾労働者 (al-ḥammālīn; 直訳すれば、荷かつぎ人夫、正確には‘ummāl al-shaḥn wa al-tafrīgh) であった。

〔出稼ぎ型賃労働—上エジプト出身の港湾労働者〕

アレキサンドリア市の港湾労働者の大半は、アスユートとソハーグ両県の農村出身者で占められている。前掲のガーニムの調査によれば、彼らの主要な出身村は、アスユート県5カ村、ソハーグ県13カ村の合計18カ村に限定されるという (ガーニム前掲書, p.xxiv, 村名は、第1表参照)。

さて、アレキサンドリア港の荷役作業は、1952年革命以前約20名のギリシア人・イタリア人からなる外国人輸出入業者によって支配されていた。彼らの支配が廃棄され、その荷役業の多くが国有化されるのは、「アラブ社会主義」化の時代、1963年のことである⁽⁴⁷⁾。しかし、これらの外国人業者が統轄する荷役作業には、早くから屈強な上エジプト人がムカーウィル (muqāwīl; コントラクター) を通じて調達されていた。そして、これらのムカーウィルは、自分と同じ村の出身者を集めて村の名を付けた労働集団をそれぞれ形成した。そしてこの同村出身労働集団の間に、荷役作業の請負いをめぐって紛争が恒常的に発生することになる。こうした状況は、荷役部門の国有化を経た今日においても変わらない。

港湾労働者は、後述するように、作業工程別に細分化された分業関係を形成するが、雇用期間の安定性から「常雇」(al-dā'imīn) と「臨時雇」(al-mu'aqqatīn) に、さらに後者は「不定期人夫」(al-ḥammālīm al-zuḥūrāt) と「季節雇」(al-mawsimīn) に区分される (p.xxxv)。もちろん、常雇より臨時雇の諸形態の労働者の方が、より「出稼ぎ」的性格が強いという一般的傾向はあ

る。また、公共部門と民間部門を比べると、後者の就業形態の方が季節的性格が強く、したがってより出稼ぎ型が多いと言える(p.116)。しかし、平均約20年就業で多くが常雇である材木人夫(公共部門)の場合でも、調査事例の31%が妻子を故郷に残して働いているという(p.118)。また、200人の標本調査によると、3カ月以内に少なくとも1回は帰村する労働者が17%、半年に1回が3.5%、1年に1回が35.5%、1年以上11.5%、緊急の時だけが3.5%という内訳であった(p.244)。ただし、妻の方が子連れでアレキサンドリア市に1、2カ月出てきて夫と一緒に過ごす例も多い。また、退職後に村に帰ると考えている人が同調査の52.5%を占めており(p.252)、村の墓に埋葬されることを望み(p.254)、また老後は水牛を購入してその乳でできたチーズを食べて過ごすのが彼らにとって何よりの夢である⁽⁴⁸⁾(p.255)。

〔出身村との経済的結びつき〕

港湾労働者と出身村との経済的な結びつきは、前者から後者への送金という貨幣形態による所得の移転だけではない。むしろ、出身村からの贈与による所得移転も少なからぬ重要性をもち、さらには出身村における不動産所有の存在が労働者と村との経済的・社会的関係の保持に役立っている。

出身村から労働者に対する贈与の中で、象徴的な意味でも重要性をもつものにズワダ(zuwāda)と呼ばれる食料袋がある。中でも季節出稼ぎを行う労働者(とくに民間部門)は、ほぼ2カ月ごとに帰郷するたびに食料袋を持ち帰り、これにもっぱら依存して都市社会の中で隔離された食生活を維持する。この袋の中には、パン・チーズ・鶏肉その他の肉、そしてファーシー(al-fāshī)と呼ばれる保存食(小麦から作ったパンを極度に乾燥させ、ミルクを加えターメリックで黄色く色付けたもの)が入っている。この他ならぬズワダとファーシーとは、上エジプトを主要な給源とする農村移動労働者(タラーヒール)の代表的な携帯品でもあった⁽⁴⁹⁾。

次に、とくに経済的安定性の高い常雇形態の労働者の場合をみると、彼らの関心は農地所有と家屋の所有に傾注されている。まず、農地の所有は老後

の生活保障と、場合によっては地代収入(ある労働者の例だと年額70~80エジプト・ポンドの額にも達する)という経済的価値をもつが、加えて重要なのは、出身村での土地所有の有無そのものがアレキサンドリア市港湾労働者社会における労働者の社会的地位を決定することである(p.140)。ただし、その土地所有の規模は、多くが零細であり(1フェッダーン未満所有が標本調査<92人>の65%, 1~3フェッダーンが33%を占める;p.129)、留守家族に耕作させるか同族の者に小作に出している。また、同上の標本調査のうち20%が町に出てきてから土地を取得しているという点も注目される(p.130)。

しかしこの農地所有以上に「家」(dār)の所有とその保持の方が労働者の社会的地位にとり重要である。すなわち、妻子を村に残して働きに出る労働者のみならず、妻子同伴あるいは独身で町に出てゆく労働者にとって、自分の親の家(bayt al-'ā'ila)から分離した独立した家(ダール)を建てることが重要な意味をもつ(p.135)。すなわち、ダールを持たない人間は村社会において「文無し」(dā'i'i)と見なされ(p.136)、またダールを売り払うことは社会的地位の低下を意味していた(p.147)。さらには、留守中にダールを他人に貸すことも、「食えないからダールを貸す」と嘲られるという(p.148)。すなわちいつでも住める状態に維持してあるダールを持ち、またいつも人を迎え訪問し合うダールを持つことこそ村社会の成員としての社会的地位を保つ物理的基盤となるのである。その意味で出稼ぎ収入で建てたダールの建築祝い(faṭḥ al-dār「ダール開き」)を執り行うことは、港湾労働者の出身村との社会的結びつきの強さを象徴する出来事なのである(p.115)。

〔同村出身居住集団の形成〕

前述のとおり、上エジプト農村出身の港湾労働者は、特定の街区に集住する。これらの出身村ごとに共住する生活集団は、後で見るように同時に労働集団としても機能している。標本調査(200人)によると、港湾労働者の88.5%が6つの区(hayy)に住んでおり(p.223)、これらの街区(hārātまたは aẓiqqa)で同居する相手は親戚(aqārib)が79.5%、それ以外の同村出身者(ahl al-balad)

が10.5%とその大半を占める (p.227)。ただし彼らは、同村出身者以外の隣人 (jirān) とはほとんど没交渉の社会生活を送る (標本調査によれば、「隣人と良好な関係を持つ」と答えた者19.5%、「悪い関係を持つ」が3.5%、そして「親しい関係を持たない」と答えた労働者が77%に達した；p.234)。このようなアレキサンドリア都市社会と断絶した社会生活は、同じく標本調査の78.5%が市内の交通機関にそれまで乗った経験がなく、ほとんど住居と仕事場との徒歩での移動だけであるという話や (p.168, また数百人の港湾労働者が繁華街の中心、ラムル駅の場所を知らないという話；p.202),あるいは映画を見にゆくことは「恥」 (al-'ayb) だと考えているという話 (p.237) に象徴的に表われている。彼らのこのような都市社会への同化の欠如 ('adam indimāj al-mujtama') の原因のひとつとして、ガーニムは「家族や村に対する連帯意識」 (al-'aṣabiya li-l-'ā'ila wa al-qarya) という「出身地」 (al-mawṭin al-aṣli) に関するアイデンティティ (al-dhātīya) 意識をあげている (p.256)。そして、労働者にとって都市とは市場 (スーク) にすぎないと述べている (p.194) のも意味するところは深い。

こうした都市社会から孤立した港湾労働者の社会生活にとって中心的な場となるのがアフワ (al-maqhā；コーヒー茶屋) である。たとえば、標本調査の85.5%が毎日、特定のアフワで同村出身者と情報交換を行うと答えている (p.238)。すなわち、同村出身者は、居住地を同じくするのみならず、特定のアフワを自分たちの溜り場とし、たとえば村から出てきた者の居住先・就労先を仲介する場所として位置づけている。そこでは、村からほとんど無一文で出てきた若者が、アレキサンドリア中央駅でたいていはガラビーヤ (エジプト風長衣) を着た物売りに彼の村の名のついたアフワの場所を尋ね、そこで知人や親戚と出会うという話 (p.196) が繰り返される。

このような同村出身者集団の都市社会における連帯を強める役割を果たすのが、数々の社会的儀礼である。すなわち、結婚式 (al-afraḥ), 子弟の割礼式 (ṭahāra al-abnā'), そしてジクル行や快気祝いのコーラン朗唱会や上エジプト風の太鼓打ちの夕べ (al-layyālī al-dhikr aw al-khātima aw al-ṭabbāl al

-ṣa'īdi)などである(p.169)。そして、これらの多くの場合、贈物(al-hadāyā)の相互交換と相互の絶え間ない訪問が重要な意味をもつ⁽⁶⁰⁾。こうした社会的儀礼と互酬の関係は、「ひとつの村の出身者の友人たち」の集団内に限定されるのである(p.170)。加えて、村出身者全員が参加する連帯を示す社会的行為が、葬儀とサルである。サルについては後で扱うのでここでは葬儀にまつわる慣行のひとつを紹介する。村出身者の一人がアレキサンドリア市で死去した時、彼の父系出自の親族(aqāribhu al-'aṣābiyīn)に対し同じ村の港湾労働者たちは金を集めてこれを贈呈するが、しかししたい1, 2日後に全額が返される。この金は実際には必要のないもので(すぐに返却するのは遺族に経済的余裕があることを示す行為である)、ただ家(al-usra)相互の関係を継続強化させるものとして機能しているだけである(p.172)。また、他の村集団との間のサルの応酬で殺された人の遺体は、村出身者全員で協力して故郷に移送し村の墓に埋葬される(p.173)。

〔港湾労働における社会的分業〕

さて、以上に述べた港湾労働者社会におけるサルは、同村出身集団の内部における社会的連帯意識を強化する社会関係であり、またその連帯意識の具体的な表出形態そのものである。こうしたサルの性格は、後で故郷の上エジプト農村と比較して論じるが、その前提条件として港湾労働そのものに関し、説明を加えておかねばならない。なぜなら、同村出身集団を形成する基本的条件、そしてサル実行の具体的原因は、いずれも港湾労働の性格、とりわけその内部における社会的分業関係に求められるからである。その場合、あらかじめ議論の焦点を明らかにしておけば、農村社会における生産過程、あるいはその生態学的条件(または同様に砂漠の遊牧民におけるそれらの条件)と比較した場合、この都市の特殊な経済部門の諸条件が、そこにおける社会的連帯意識、あるいはその表現形態であるサルの性格とどのような関係をもっているのかということが問題にされるであろう。

アレキサンドリア港における港湾労働は、少なくとも以下の3つのレベル

でさまざまな職種・労働過程別に分業関係を構成している。

まず第1は、作業場所別の分業である。これは基本的に甲板労働者(ḥammāl al-bākhira, または al-kūrata, 「上」〈fawq〉の労働者とも言う)と埠頭労働者(ḥammāl al-raṣīf, または「下」〈taht〉の労働者とも言う)に分かれる(p. 51)。すなわち、いわゆる「沖仲士」と「沿岸仲士」である⁽⁵¹⁾。

第2は、作業工程別の分業である。まず甲板労働は、ウィンチ労働者(wināsh), 倉庫労働者(anbarjī), デッキマン(hikāka), といった職種に分かれる。ウィンチ労働者は、ウィンチを用いて埠頭と甲板の間の貨物の上げ降ろしを行う作業を行い、倉庫労働者は、貨物の積み降ろしの準備、とくに貨物にワイヤーや綱をバランスよくかける熟練を要する職種である。倉庫労働者は、さらに材木の荷造りや棉花に特化した集団へと分かれる。デッキマンは、「上」と「下」の労働者の間を連結する役割を果たす事実上の監督(mushrif)である。これら3つの職種の重要度は、デッキマンーウィンチ労働者ー倉庫労働者の順であり、したがって昇進(tarqīya)もこの逆の順序で行われている(pp.54-58)。他方、埠頭労働者は、大きく区別して一般の埠頭労働者と重労働の袋かつぎ労働者(ḥammāl al-juwāl)に分かれる。後者は、米や豆、タマネギなど袋詰め貨物の積み降ろし、とくに積み上げに特別な熟練を要する労働で比較的高齢者が多く従事している。

以上に述べたさまざまな職種への特化と熟練形成においては、同村出身集団が大きな役割を演ずる。すなわち、新入りの労働者は、同村出身の先輩からのみ技術を伝達されるのであり、いわばこうしたインフォーマルな職業訓練の過程が、同村出身者集団の連帯を強めるのである(p.179)。

さて、以上の甲板労働・埠頭労働のいずれにおいても作業全体を指揮・監督し、また荷役作業を輸出入業者・機関から請け負ってくるのが、ムアッリム(mu'allim, 「親方」)である。全ての作業集団、すなわち同村集団は、このムアッリムの下に統轄されている。これらのムアッリム(やはり、甲板と埠頭に分けられる)は、しばしば、特定の貨物の種類ごとに特化している(pp.58-59)。

第1表 アレキサンドリア港港湾労働者の同村労働集団

I 主要な同村労働集団

村名	出身県	特化した職種	労働者数	居住地区	従属する村集団
① Juhayna	ソハーグ	配給物資	2,000人	al-Wardiyān al-Qabbāri	⑬
② al-Ṣawāmī'a	ソハーグ	甲板作業 一般貨物	800人	al-Labbān	⑧・⑬
③ Abnūb al-Ḥamām	アスュート	埠頭作業 一般貨物(公共部門)	1,000人	al-Gumruk	
④ Nazza	アスュート	材木荷役の独占 (公共部門)	500人	al-Wardiyān	⑳・㉑
⑤ al-Ghanāyim	アスュート	「袋かつぎ」労働に特化	500人	Kūm al-Shufāqa Karmūz	⑨・⑬・⑰
⑥ al-Ṣawīya	ソハーグ	埠頭作業	600人		

⑰はSaḥa al Saḥin

II その他の力の弱い同村労働集団

村名	特化した職種	村名	特化した職種
⑦ al-Riyāna	棉花荷役	⑬ al-Mushāwada	袋かつぎ労働
⑧ Awlād Shahāta	袋かつぎ労働	⑱ Zayd	
⑨ al-Talāwa	同上	⑳ Shandawīl	材木荷役
⑩ Ṭaḥṭā	同上	㉑ al-Benhawīya	同上
⑪ al-'Umūr	埠頭労働	㉒ al-Shūka	棉花荷役
⑫ al-Marāgha	同上	㉓ Tall al-Zūka	
⑬ Awlād Ismā'il	同上	㉔ Banī Shāḥ	
⑭ al-Kawmīya	棉花荷役	㉕ Kūm Safḥat	棉花荷役
⑮ Naj' Abū Qisṭ	袋かつぎ労働	㉖ Mūshā	同上
⑯ Ṭamā	同上	㉗ Dīr al-Janādala	材木荷役

第3の分業関係は、この貨物の種類ごとに労働集団が形成されるものである。貨物の種類は、主として①材木、②配給物資(主として小麦粉)、③「バラ」(ṣabb, 石炭・化学肥料・塩などの流動物、主として民間部門の港湾労働者が従事する)、そして④一般貨物(棉花・米・タマネギ・自動車他)に分けられる。その他として、火気注意の危険貨物を専門とする港湾労働者もある(pp.42-47)。

さて、以上の分業関係の中で、ムアッリムを頂点に編成された職種別構成(デッキマン、ウィンチ労働者他)をもつ労働集団が、それぞれ作業場所や貨物の種類ごとに特化して形成されることになる。その場合、重要なのはこれら

の集団がすでに述べたように、ムアツリム (=ムカーウィル) をはじめとして上エジプトの特定農村の出身者で占められた同村出身労働者であるという点である。

第1表は、これらの同村出身集団とのおおよその人数、そして彼らが特化している作業・貨物の種類、および彼らの居住区を示したものである。そこには勢力の強い6つの村、あるいは同村出身集団(I)と、これに比べると勢力の弱い(人数の少ない)21の同村出身集団(II)が表示されている。以下に述べるようにこれらの集団は、労働集団であると同時に、サルを行う政治的単位ともなる。

〔同村出身労働集団とサル〕

同村出身集団は、労働集団、あるいは特定の貨物やその荷役作業の特定の過程を請け負う利益単位 (*waḥda al-maṣlaḥa*) であると同時に、まさにその荷役作業の請け負いをめぐって相争う政治的単位でもある。もとより、両者の性格は相互規定的である。そして、ほぼ恒常的に存在する同村出身集団相互の緊張と社会的紛争は、継起的に連続するサルの応酬という社会関係の形態をとる。

ここで、あらかじめ上エジプト農村内部におけるサル慣行との比較から導き出される主要な特徴を述べておけば、それはサルの実行が村内における親族集団単位(第2節のバニー・スィミーウ村の例ではバダナ <lineage>)の間ではなく同村出身集団の間、いわば村へと拡大しているという点である。すなわちたしかに村の中ではアーイラのレベルでサルが行われているが(p. 368)、ここでは「アーイラの考えは捨て」すべての村がひとつの政治的単位となり、違うアーイラやバダナの者に対する危害に対してもサルの実行に参加する(p.362)。また、サルの実行だけが村の地位を守るのであり、それはムアツリムの権利が侵害されないよう防衛するために行われるのではない(p. 361)。そして、サルの実行がアーイラ成員だけに限定される時には、人々はその「血の冷たさ」(*bard al-damm*)を非難するという(p.369)。そして、村

はサアル実行の単位（いわば「血の場」〈nuḡṭa al-damm〉）であると同時に、サアルの仲裁（al-ṣulḥ）を行う単位である。しかしそこには村内におけるような長老（shaykh）の仲裁の機能は見られずに、村全体が「仲介の村」（al-qarya al-wasīṭa）となり個人の人格を消滅させて「村の重み」で仲裁を行う（p. 369）。

以上のサアル単位の親族集団（バダナ、アーイラ）から村（正確には同村出身集団）への拡大は、いわば「親族の系譜」（khuṭūṭ qarābiya）から「出身（あるいは所属）の系譜」（khuṭūṭ intimā'iya）への連帯意識の転換を意味するものと言することができる（p. 370）。その場合、しばしば本当の親族関係がなくても同じ村の出身者であると、カライーブ（qarāyib、親族をしばしば示す言葉 qarībの複数形）と表現する（p. 281）⁽⁵²⁾。そして、こうした村単位の社会的連帯意識は、前述のような都市社会の中で孤立して営まれる上エジプト農村出身者の社会生活と結びついていたといえる。彼らは「アレキサンドリア人」（iskandar-ānī）ではなく上エジプト人（サイーディー）であることを誇りに思い、またこのサイーディーとしての意識は自分の故郷の村への帰属意識と結びついているのである。すなわち、村こそ彼が帰属するワタン（waṭan；いわば「くに」）なのであり、他方アレキサンドリア都市社会に同化し自らをもちや「他者」（al-ghurba）とは感じなくなった労働者は、「国家が全てひとつである」（al-dawla kull-hā wāḥida）と答えているのである（p. 250）。ここに示された「ワタン」と「ダウラ」という2つの国（「くに」）を意味する言葉が指し示す帰属意識の偏差こそ現代エジプトにおける社会統合の状況のあり様そのものをも反映しているのである⁽⁵³⁾。

〔サアルの法—同村出身集団間における「連合」関係の形成〕

第2節で述べた上エジプト農村の事例においては、サアルは、その実行単位である親族集団における父系の出自原理（いわゆるアサバ意識）と、サアルの実行そのものを支える名誉意識（すなわち男性優位原理に支えられた価値意識）との間に密接な関わりを持つものであった。サアルの単位が村出身の集団へ

と拡大したアレキサンドリア市港湾労働者の場合においても、後者の名誉＝恥辱感情の基本的性格は維持される。すなわち、サアルに成功するまでは眼を上にあげられないほどに失望し、敗北感を覚えるという (p.363)。また、この名誉意識の別の表現である、女や子供に対しては危害を加えない (ta'arruḡ) というサアルの「慣習」(ウルフ) は、村と同様この港湾労働者社会でも守られている。仮に婦女子に危害が加えられた場合には、同村出身集団全体で村の地位 (markaz) を危機におとしめる恥辱 (al-'ār) に対し涙を流すという (p.366)

また、サアルの実行単位の拡大は、サアルの法 (カーヌーン) の拡大的適用をもたらす。すなわち、サアル実行に際して村内において形成された親族集団 (バダナやアーイラ) 相互の「連合」関係は、アレキサンドリア市港湾労働者社会においては、同村出身労働集団の単位のレベルで再生産されることになる。その場合、村において強力な親族集団 (戦闘成員の多い大バダナ) に対し、弱小親族集団が庇護同盟関係に入り、これを「囲む」という関係をとったのと同様に、強力な同村出身集団のまわりを弱小村落集団が「囲む」わけである。

こうした「連合」関係の拡大的再編において重要な意味をもつのが、前述の居住形態における集住性 (takattul) と港湾労働における分業関係である。第1の集住性についていえば、同村出身集団は特定の街区に集住するのみならず、これと「従属関係 ('alāqa taba'īya) にある他の幾つかの小規模な同村出身集団も同一地区に居住する状況が見られる (p.350,362)。「連合」関係は居住地区の共有によっても強められているわけである。ただし、これらの力の強い同村出身集団の「軌道」(falak) の中に取り込まれた小さい同村出身集団は、この「連合」関係を「自発的な手段」(ṭarīqa 'afwīya) で結んでいるわけではない。この関係は、これらの集団が特定の貨物や作業場所などを等しくするひとつの労働単位、そして利益単位として組織されていることにもとづくことが重要である (p.350, 詳しくは第1表の例を参照)。そして、このような港湾労働における分業関係に基礎をおいた同村出身集団の「連合」とい

う利益単位の形成、そしてサアル実行のための政治単位の形成は、次に述べるムアッリムによる仕事の請負いという労働集団内部における権力的関係によってその骨組みを与えられていたのである。

港湾労働者にとってムアッリムは、いわば裁判官 (al-qaḍī) や支配者 (al-ḥākim) そのものである (p.354)。すなわち、彼の意志によって仕事の割り振りや、場合によっては仕事の取り上げという制裁が行われ、さらにはしばしば彼は直接的暴力をふるって労働者集団を統轄している。この社会では、ムアッリムはある意味で村社会における長老(シャイフ)の存在、あるいはいわゆる長老制的支配そのものを代替する機能を果しているということができるともかもしれない。その支配の性格は、他の東アラブあるいは地中海都市部におけるパトロン＝クライアント関係のそれと比較できるであろう⁽⁶⁴⁾。さて、村における親族集団と長老と、港湾労働者社会における同村出身集団とムアッリムを比較するときひとつの基準となるのは、それぞれが依拠する物理的・経済的基盤の相違であろう。前者においては(第2節の事例では必ずしも明確に提示されていないが)、農地のアーイラの所有の存在であり、後者では請負われた仕事の機会の独占である。しかし、両者には共通する支配の構成原理がある。それは前述のウルフの継続にも表現されているような、男性優位の価値観に裏づけられた親族関係(アサバ的關係)がもつ機能である。すなわち村での親族集団(バダナやアーイラ)から同村出身集団、いわば村へとサアルの単位が拡大した場合において、親族関係はとくにムアッリムの支配を通じて継続維持されている。たとえば、同村出身集団は、対等の村の成員の結合体ではなく親族集団(アーイラ)を基本的な構成要素とするものである。そこでは村におけるそれぞれのアーイラの勢力が直接反映するというよりは、むしろそれぞれのアーイラの成員がどのような職種(とくにデッキマンやムアッリムという監督職)についているかが重要である (p.373)。中でも、ムアッリムは、父系出身の同族(aqāribhu al-‘aṣabīyīn)を監督職に配し、とくに息子にムアッリム職を相続させる (p.356)。

以上に述べたように同村出身労働集団における社会的連帯(それはサアルと

いう形態をとって発現する)は、港湾労働における分業関係と村内と同様の親族関係の両者に基礎を置いた権力的関係(ムアッリムのアーイラによる支配)によって色づけられているのである。

〔港湾労働者社会におけるサアルの変容〕

港湾労働者集団におけるサアルの応酬は、かつての外国人の輸出入業者による外国貿易業務の支配の時代にさかのぼる。すなわち、外国人業者は、しばしば彼らの荷役業務を独占的に請負うムアッリムと関係が悪化するとすぐに他のムアッリム(基本的に同じ村のムアッリムは避ける)へと下請け先を転換する。こうした不安定な請負い関係それ自体が、ムアッリムを頭に頂く労働集団相互の絶え間ない抗争の原因となる。これらの数百にも及ぶ流血の抗争は、仕事現場の港を越えて居住地区やアフワにまで拡大してしばしば警察の介入を招いた(p.353)。

こうした抗争は、外国貿易業務と荷役作業が国有化された後も継続した。ガーニムはその一例として、1975年の7月に始まったナツザ村集団(アスュート県出身、公共部門の木材荷役作業を独占する強力な集団、ナツザ衆(al-nazzāwī)あるいはal-nazāzwaとと呼ばれる)とナジア・アブー・キスト村(ソハーグ県出身、袋かつぎ労働に特化する弱小集団、ナジア衆(al-naj'āwī)と呼ばれる)の間の抗争を記録している。争いの発端は、ナジア衆の港湾労働者がナツザ衆の電気工(al-kahrabā'i)に依頼したラジオの修理が遅れたことをめぐる口論で後者が前者を殴ったところ、そこが「ナツザ村のアフワ」であったために同席した他のナツザ衆が襲いかかり、これにナジア衆の兄弟が所持していた銃を思わず発ち二人が死亡、二人が負傷したことにある。これに怒ったナツザ衆は仕事からの帰り道でナジア衆を待ち伏せ、逃げ遅れた一人を惨殺する。彼は、最初の加害者と同じアーイラでもなければ同じバダナでもなく、ただ同じ村の比較的有名な人物の兄弟というだけで殺されたのであった(逆の意味の諺として「ライオンの中の犬を取る」というのがある)。しかし、この後ナツザ衆がナジア衆の家宅捜索を行った時、女や子供に手を出さないというウルフ

は守られた。ただし、両者の緊張関係は極度に達し、サアルがまだ完結していないということで、死亡した三人の遺体の葬式は出せず政府の関係者がその埋葬を行った。

この抗争は結局、同年12月に、ナZZア衆と友好関係にあり同時にナZZア衆と居住区を共にする「第三の村」、強力な村集団のひとつガナーイム(アスユート県、袋かつぎ労働が専門。その同居地区には三つの従属する村集団Saḥa al-Salīm, al-Talāwa, al-Kawmīya も居住するが、ナZZア衆がその「連合」関係に入っているとはガナーイムは述べていない)が仲介して、治安当局の立会いのもと和平がはかられた (pp.364-367)。

しかし、ここで紹介した同村出身労働集団を単位とするサアルの実行にもしだいに変化が起こりつつある。第1の原因は、荷役部門の国有化の影響である。すなわち、国有化によってとくに公共部門において政府から任命されたムアッリムは、労働者にとってもはや「役人」(muwazzafin) にしかすぎなくなり、彼らのためにとっても自らの死を賭してまでサアルを行おうとは思わなくなったという (p.358)。また、国有化による公共部門の荷役作業の経営は、同村出身集団相互の抗争を減少させた。第2は、民間部門のムアッリムにおいてもかつてほどの力はなくなった。外国人業者から公共部門へと下請け関係が変わった公共部門のムアッリムとは違って、民間部門のムアッリムは自らが仕事主 (aṣḥāb al-'amal) であり、公共部門の成立後も経済基盤と権力を保持していた。しかし、新しい状況として、同じ村から複数のムアッリムが、したがって複数のアーイラの背景をもつ労働集団が形成されてきたことが指摘される (p.359)。これは村単位の労働集団、したがってサアルの実行単位=政治的単位のアーイラへの分解を意味していた。ただこの場合でも、複数のアーイラ労働集団は同じ仕事を共有し、輪番制 (niẓām al-dawr) によって村集団内部で仕事を廻し合っているようである (p.360)。

こうした村単位の集団のアーイラ単位への分解と並行するように、サアルの現象にも変化が見られるようになった。すなわち、現在では、サアル実行が村単位というのは外観上の形態であり、実際にはサアル実行で最も責任が

あるのはやはり当事者のアーイラである。たとえば、仮にサアルが同じ村集団の他のアーイラによって行われた場合、警察への申告においては当事者のアーイラが責任をとらねばならない (p.363)。さらには今や「村の名」よりも家族や子供たち (al-usra wa al-awlād) への個人的利害の方が重要になったという (p.362)。

今ではサアルも早急な和平か、あるいはサアルに対する「中立性の表明や明白な介入の欠如、事態の監視だけの満足、完全な沈黙」が見られるようになり (p.363)、また、サアルの範囲が再び村からアーイラへと縮小する現象も見られるようになった (p.367)。

こうした都市社会におけるサアル発生 of 諸形態の中でもっとも注目されるのは、親族集団のアーイラ内部においてサアルが発生するようになったことである (p.375)。このアーイラ内部の小家族 (ウスラ) 間で行われるサアルは、村では発生することが法 (カーヌーン) において制御されていた。これは、都市社会ではこうした大規模親族集団による社会関係の伝統的な統御機能が働かなくなりつつあることを意味しているのかもしれない⁽⁶⁵⁾。

以上に見たサアルの変容した諸形態の併存こそが、現在エジプトの都市化と社会的連帯の複雑なあり様を示しているといえるのである。

むすびにかえて

第2節で述べた上エジプト農村におけるサアルの「伝統的な」型と、第3節で紹介したその変容形および解体形というべきものを比べるとき、少なくとも次のような2つの系列の議論が可能である。第1は類型論的把握であり、第2は歴史発展の過程として捉えようという視角によるものである。

第1の類型論 (あるいは「共同体論」) によれば、農村 (特殊な灌漑農業システムによって特徴づけられる) と都市 (しかもその特殊な生産サービス部門) というそれぞれの社会的・生態学的環境において、どのような社会的連帯意識を

基盤とする社会集団の形成が行われているか、その構成要素とその組み合わせを要因分析する方向で議論が展開することになる。その場合、直接的に把握することのできない道徳的現象としての社会的連帯意識の主要な発現形態であるサル（feud）という社会的行為、あるいは社会関係そのものが、議論の重要な素材を提供するわけである。さらには、この「農村」、「都市」に加えて、これまで同様の調査が行なわれてきた「砂漠」のそれを比較類型論に加えることも可能であろう。すなわち、それはアラブ社会分析の古典的な類型論〈砂漠－農村－都市〉の教科書的事例となるかもしれない。

そこではいずれもアサバ原理という共通した親族構造の特徴をもつ一方で、3つの地点でさまざまな経済チャンスの占有がこれと組み合わせられて社会的連帯の諸類型をつくりあげている。すなわち、砂漠の場合は遊牧生活にとって不可欠の放牧地や水場の占有が、農村の場合には灌漑耕地の分割や灌漑水そのものの占有が、そしてこの都市の特殊な経済部門（近代部門のように雇用機会など経済チャンスの配分が制度化、合理化されていないインフォーマル部門）においては特殊な分業関係に裏づけられた経済チャンスの占有が問題となるわけである。その場合重要になるのは、マックス・ウェーバーの表現を借りるなら、それぞれの経済チャンスをまず対外的に閉鎖する（たとえば、上エジプト農村の場合は自らの村の属するベイスン灌漑水に対して、またアレキサンドリア市港湾労働者においては、雇用機会を上エジプト農村出身者だけにほぼ独占させる）行為が論理的には先行すること、そしてこの対外閉鎖過程において使われる組織原理（親族関係やその他のアイデンティティ形成要因）が、今度是对内的に経済利害を閉鎖する（経済チャンスを集団的に分割・占有する）場合において用いられるという過程である⁶⁶⁾。こうした経済チャンスの対外的・対内的閉鎖のプロセスそれ自体が類型分析の対象ともなるわけである。このプロセスにおいて、サルの形態と性格が、それぞれの諸類型を区分する重要な特徴となることは言うまでもない。

第2の議論の方向は、サルおよびそれを支えた構造原理そのものの変質＝解体の過程をたどろうという視角によるものである。第3節の末尾の方でふ

れておいたように、アレキサンドリア港湾労働者社会において「再編」されたサアルは今や大きく変質しようとしているようである。すなわち、①サアルの単位を親族集団（バダナ）から村出身集団へと拡大させ（同時に、「連合」関係も拡大再版させ）、同時に②農村における集住性を都市の街区の中に再生産し、③農業の利害から都市の職業の雇用機会の利害へと利益単位の基盤を変換させ、また④村の長老制支配という直接的な家父長的権威からムアッリムの支配といういわば「都市的な」権力関係へと転換するという幾つかの「変態」過程に成功して「再版」されたサアル慣行は、実のところその社会的基盤が脆弱なものであったといえるかもしれないのである。そこでは世界史的に不可逆的に進行しつつある近代資本主義的な社会的分業のもたらす社会変容の過程が検出できるのか、それとも本稿の「序論」で述べたようなイブン・ハルドゥーンによるアサビーヤ論の有効性が実証できるのか、これをめぐって議論が展開されることになる。

[注]

- (1) 拙稿「『石油の富』と移民労働—中東産油国への労働力移動」（森田桐郎編『労働力は国境を越える』第4章 同文館出版 1991年）を参照。
- (2) Ibrahim, Saad Eddin, “Anatomy of Egypt’s Militant Islamic Groups : Methodological Note and Preliminary Findings,” *International Journal of Middle East Studies*, Vol.12 No.4, Dec. 1980. 同論文の翻訳サアド・イブラヒム『エジプトにおけるイスラム過激派集団の解剖：方法論と予備的結論』（中邑豊朗監訳）中東経済研究所 1982年 中東経済調査シリーズNo.3を参照。
- (3) Shukri, Ghāli, *al-thawra al-muqādda fī miṣr*〔エジプトの反革命〕, Beirut, Dār al-Ṭalī’a, 1978, Chap.3 参照。シュクリーは、この「エジプト的な街路の運動」（大衆の直接示威行動）が共産党によってもムスリム同胞団によっても把握することのできなかつた独自の歴史的な性格をもつものにとらえている（*ibid.*, p.249）。
- (4) 1977年1月の「食糧暴動」については‘Abd al-Rāziq, Ḥusayn, *miṣr fī 18 wa 19 yanāyir:dirāsa siyāsīya wathā’iqīya*〔1月18・19日のエジプト：政治的資料的研究〕, Beirut, Dār, al-Kalima li-l-Nashr, 1979を参照。1897年反ナポレオン暴動についてはジャバルティーの記述に依拠した Baer, Gabriel,

“Popular Revolt in Ottoman Cairo,” idem, *Fellah and Townsman in the Middle East Studies in Social History*, London, Frank Cass, 1982, Part Four Chapter 1 を参照。アブドゥラーズィクは、ジャバルティーの年代記を引用して、この18世紀末の「最初のカイロ暴動」こそ1977年に繰り返されることになる「エジプト人の民衆蜂起のモデル」であったと述べている。‘Abd al-Rāziq, *op. cit.*, p.79 また、1977年の「食糧暴動」の背景については、拙稿「エジプト—食糧補助金と都市貧困層」（宮治一雄編『中東の開発と統合』アジア経済研究所 1985年）を参照。

- (5) ジャバルティーの年代記に登場する都市下層民を（多くは侮蔑の意味を込めて）形容する言葉としては、al-‘amma, al-‘awāmm, al-ghawghā, al-ja‘īdiya, arādhil al-sūqa, al-awbāsh, al-ḥasharāt, al-ḥarāfishがある。Baer, *op. cit.*, p.229. 1977年1月暴動当時の内務省次官であったAḥmad Rushdī（後に内務大臣となり1986年2月の治安警察隊暴動で解任される）の国会での証言にも、こうした表現が見出される。‘Abd al-Rāziq, *op. cit.*, p.83.
- (6) Abu-Lughod, Janet, “Migrant Adjustment to City Life : the Egyptian Case,” *American Journal of Sociology*, Vol. 67, July 1961. および彼女の研究結果を約10年後に再検証した Petersen, Karen Kay, “Villagers in Cairo : Hypothesis versus Data,” *American Journal of Sociology*, Vol.77 No3, Nov. 1971. を参照。
- (7) この発展途上国の普遍的な都市理論のひとつとして用いられる over-urbanization の概念もまたエジプトを事例として生み出されたものであった。Davis, Kingsley and Hilda H. Golden, “Urbanization and the Development of Preindustrial Areas,” *Economic Development and Cultural Change*, Vol.3, 1954/55, および駒井洋「開発途上社会の都市理論」（林武編『発展途上国の都市化』アジア経済研究所 1976年）を参照。
- (8) カイロについては、Abu-Lughod, Janet, “Tale of Two Cities : the Origins of Modern Cairo,” *Comparative Studies in Society and History*, Vol.7 No4, July 1965, アレキサンドリアについては、Reimer, Michael J., “Colonial Bridgehead : Social and Spatial Change in Alexandria, 1850-1882,” *International Journal of Middle East Studies*, Vol.20 No4, Nov. 1988 を参照。
- (9) J.アブー・ルゴッドに代表される「都市の農村化」論には、とくにそこで「農村的」と扱えられる現象をめぐる一定の批判が可能である。たとえば、農村的な生活様式・価値観と見えるものも、実は他の途上諸国と比較可能な「貧困の文化」的な現象ではないかという批判もありうる。本稿では後述のとおり、この問題について「土着的な都市化」という試行的な表現を用いてひとつの見方を示したつもりである。また、「貧困の文化」論的視角に立つエジプト人研究者の実証的研究としては以下のものがある。Ghāmīrī, Muḥammad

Hasan, *thaqāfa al-faqr : dirāsa fī anthrūbūlūjīya al-tanmīya al-ḥaḍarīya*
〔貧困の文化：都市開発人類学的研究〕 Alexandria, al-Markaz al-‘Arabī li
-l-Nashr wa al-Tawzī‘ 1980 および同書の紹介を行った店田廣文「エジプト
のスラムの実態」（『アジア経済』第25巻第4号 1984年4月）を参照。

- (10) 今日のエジプトの都市における伝統的街区の社会関係については、たとえ
ば Nadim, Nawal al-Messiri, “Family Relationships in a ‘Hara’ in Cairo,”
in Ibrahim, Saad Eddin and Nicholas S. Hopkins eds., *Arab Society in
Transition*, Malta, The American University in Cairo, 1977 を参照。およ
びこのナディームの調査を積極的に評価・引用しているアブー・ルゴッドの
次の論文を参照。Abu-Lughod, Janet L., “The Islamic City-Historical
Myth, Islamic Essence, and Contemporary Relevance,” *International
Journal of Middle East Studies*, Vol.19 No.2, May 1987.
- (11) Maḥfūz, Najīb, *awlād ḥāra-nā*, Beirut, Dār al-Ādāb, 1978, および同書の
英訳 Mahfouz, Naguib, *Children of Gebelawi*, trans. Philip Stewart,
London, Heinemann, 1981. この小説は1959年に *al-Ahrām* 紙に連載された
が、単行本としての印刷は国内では政治的理由から認められず、ようやく1967
年にベイルートで初版が出たという。国内での発禁の理由は、ひとつには同
書の宗教的素材の扱い方に対するイスラム勢力の批判があるが、もうひとつ
は最終章でナセルによるムスリム同胞団弾圧を暗に批判した点も挙げられる
のではないと思われる。この問題については以下の文献を参照。林武「都
市化と人間類型—カイロ市井人の理想像」（林武『現代アラブの政治と社会』
アジア経済研究所 1974年 172ページ）；Vatikiotis, P.J., “The Concept of
Futuwwa, a Consideration of Despair in Naguib Mahfuz’s *Awlād Hārah
-nā*,” *Middle Eastern Studies*, Vol.7 No.2, May 1971 ; Nijland, C., “Naguib
Mahfouz and Islam : An Analysis of Some Novels,” *Die Welt des Islams*,
Vol.23-24, 1984 ; Milsoa, Menahem, “Najib Maḥfūz and Jamāl ‘Abd al-
Nāṣir ; the Writer as Political Critic,” *Asian and African Studies*, Vol.23
No.1, March 1989.

また、フトゥーフの人間類型については、前掲林論文の他、次のような歴
史研究を参照。佐藤次高「バグダードの任侠・無頼集団」（『社会史研究』第
3号 1973年）；El-Messiri, Sawsan, “The Changing Role of the Futuwwa
in the Social Structure of Cairo,” Ernest Gellner and John Waterbury eds.,
Patrons and Clients in Mediterranean Societies, London, Gerald Duck-
worth and Co. Ltd., 1977. これらの研究で本稿の主題との関連で重要なのは、
フトゥーフおよびその連帯意識の暴力的発現形態における都市的性格（農村・
砂漠とは区別された）の問題である。したがってこれは後述のイブン・ハル
ドゥーンの問題とつながる問題である。

- (12) Cole, Juan, "Of Crowds and Empires : Afro-Asian Riots and European Extension, 1857-1882," *Comparative Studies in Society and History*, Vol. 31 No.1, January 1989.
- (13) こうした「都市暴動」という形態をとる民族的抵抗の形成とよく似た問題が、遊牧社会における「原初的」な民族運動（たとえば、キレナイカやソマリア遊牧民の反帝国主義運動）についても指摘できる。すなわち、遊牧民の日常的 feud から war, 民族抵抗闘争への転化である。Black = Michaud, Jacob, *Cohesive Force Feud in the Mediterranean and the Middle East*, Oxford, Basil Blackwell, 1975, pp.56-57 参照。
- (14) 現代アラブ研究におけるアサビーヤ概念のもつ重要性については、拙稿「アサビーヤ概念をめぐる」(『アジ研ニュース』No.166 1986年3月)を参照。それが用いられるコンテクストによって多様な意味をもつこの'aṣabiyaという言葉について詳しく説明することは、本稿の目的の範囲外である。ここでは、この'aṣabiyaと同一語根('ṣ-b)である ta'aṣṣubという言葉に関し、アハマド・アミンが加えた説明をひとつの参考例と示すに留めたい。(この ta'aṣṣubという言葉にも Hans Wehr の辞書 (Cowan, J.M.ed., *Hans Wehr Dictionary of Modern Written Arabic*, Ithaca, Spoken Language Services Inc., 1976, 3rd ed., p.616)によれば, party spirit, race consciousness, tribalism, fanaticism などの多様な意味がある)。彼は『エジプト慣習伝統表現辞典』(Amīn, Aḥmad, *qāmūs al-'ādāt wa al-taqā'id wa al-ta'bīr al-miṣrīya*, Cairo, Maktaba al-Naḥḍa al-Miṣrīya, 2nd ed., 1953) の中で、この ta'aṣṣub (ここでは便宜的に結束性^{クアッサブ})と訳しておこう)について、次のような説明を加えている。「ある部分のエジプト人においては、一定の形をもつ結束性がきわめて強い。たとえば、族的集団 (qawm) やむら (balad), あるいは宗教 (dīn) に対する結束性である」。こう述べた後でアミンは、エジプトにおけるこの結束性の例として、次の4つの事例をあげている。第1は、全ての村がサアド (Sa'd) とハラーム (Ḥarām) という2つの党派 (ḥizb) に分かれ、時にサアルを行っていたという事例、次は同じく、アブー・ザイド派 (Abū Zayd al-Hilālī) とこれに敵対するザグバ派 (al-Zaghba) の抗争である。第3と第4の事例は、近代以降のもので、第3は革命前の諸政党、ワフド党・サアド主義党・立憲自由党の間の抗争、第4は第二次大戦中多くのエジプト人がドイツ側に連帯感^{クアッサブ}を示したことである。この4つの例に見るように、ta'aṣṣubはかなり大きな差異をもつ社会的歴史的コンテクストの中で用いられていることがわかる。
- (15) Gellner, Ernest, "Cohesion and Identity : the Maghreb from Ibn Khaldun to Emile Durkheim," idem, *Muslim Society*, Cambridge, Cambridge University Press, 1981.

このゲルナーが取り上げたイブン・ハルドゥーンにおける urbanism とアサビーヤの関連については多くの研究があるが、関連する著作としてたとえば以下の社会学的研究を参照のこと。Baali, Fuad, *Society, State and Urbanism Ibn Khaldun's Sociological Thought*, Albany, State University of New York Press, 1988. イブン・ハルドゥーンの『歴史序説』(al-muqaddima) には、以下の邦訳がある。(1)田村実造他訳『イブン・ハルドゥーンの「歴史序説」』アジア経済研究所 1963年 2巻, (2)森本公誠訳・解説『歴史序説』岩波書店 1979, 80年。

- (16) E. デュルケーム (田原音和訳)『社会分業論』(現代社会学大系2) 青木書店 1971年, 森本公誠『イブン=ハルドゥーン』(人類の知的遺産22) 中央公論社 1980年。
- (17) たとえば Baali, *op. cit.* および森本前掲書を参照。
- (18) Hourani, Albert, *Arabic Thought in the Liberal Age 1798-1939* London, Cambridge University Press, 1983 rev. ed, p.23 イスラム政治思想から出発し、近代以降のさまざまな政治潮流を考察した本書において、アサビーヤ概念は、イスラムの共同体、民族主義、近代国家形成との関連で豊富な意味を与えられている。また、彼の提案した urban asabiya の問題にかかわる代表的研究として Lapidus, Ira Marivin, *Muslim Cities in the Later Middle Ages*, Cambridge, Harvard University Press, 1967 がある。
- (19) デュルケーム 前掲書 65ページ。
- (20) 同上書 86, 87, 181ページ。
- (21) Peters, E.L., "Some Structural Aspects of the Feud among the Camel-herding Bedouin of Cyrenaica," *Africa*, Vol.37 No.3, July 1967, および Black=Michaud, *op. cit.* を参照。

以下、このブラック・ミコード等の研究にもとづき、本稿の不十分な議論の理解を助けるためにも、feud をめぐる問題について若干の解説を付する。

まず feud は、ピーターズが述べたように「一組みの関係」(a set of relationships) であり (Peters, *op. cit.*, p.262), 類似の概念 vengeance, talion, blood revenge, vendetta などと区別される。たとえば, feud は, vengeance や vendetta と違い集合行為 (collective action) であるし, また同じく暴力的な集合行為である warfare は, feud と異なり非選択的 (non-selective) 性格をもっている (Black=Michaud, *op. cit.*, pp.28, 30)。そして, feuding parties 間の relationship としての feud には, 平等主義的な (egalitarian) 性質をもつこと, 制度化された権力の不在という社会構造の中で成立すること, 一種のゲームにも似て負の価値を相互に移転し合う連続性, あるいは永続性をもつといった特徴がある。(ibid., pp.24-26)。

したがって, feud がこれまで「血讐」(すなわち blood revenge) という文

化的偏見をもつ翻訳語を当てられてきたのは、ピーターズ＝ブラック・ミコードの立場からすれば適切とは思われない。本稿では適当な訳語がないので feud のまま使用する。たとえば、同害報復 (talion) では feud 関係の一原則を示すにすぎない。さて、アラビア語の *tha'r* についても、一般的な用法では復讐 (vengeance) 一般に使われることがあるが、本稿ではこの復讐一般については *intiqām* という言葉が妥当と考え、feud に対応するものとして *tha'r* を用いることとした。

さて、このピーターズ＝ブラック・ミコードの feud 論のうち、本稿の内容と関係する重要な問題提起は、以下の諸点である。まず、デュルケーム以来の機械的連帯論にもとづく平板な分節理論的説明の批判である。とくに *unsegmentary behavior* の存在を指摘し、契約的同盟の事例など、*affinity* や他の諸利害による feud group 形成における操作可能性に力点を置いている (*ibid.*, pp.54-62)。もうひとつの積極的論点は、中東・地中海世界における feud 現象の顕著な類似性 (notable similarity) を指摘しつつも、その具体的発現形態における生態学的条件の規定性について大きな関心を払っている点である。その場合興味深いのは、定着農耕社会より遊牧民の方が feud group の契約的性格が強く、同族 (agnation) の理念が物理的生存の条件に従属するといった特徴が見られると指摘していることである (*ibid.*, p.62)。

- (22) Reimer, *op. cit.* によれば、アレキサンドリアは上海・オデッサ・ニューオーリーonzと並び産業革命後の世界経済の拡大の中で成長した典型的な国際商業都市であり、「エジプトが植民地となる以前から植民地都市であった」(*ibid.*, p.531)。Chainchian, Mohammad A., “The Effects of World Capitalist Economy on Urbanization in Egypt 1800-1970,” *International Journal of Middle East Studies*. Vol.20 No1, Feb. 1988.
- (23) Reimer, *op. cit.*, p.539.
- (24) Lawson, Fred H., “Rural Revolt and Provincial Society in Egypt,” *International Journal of Middle East Studies*, Vol.13 No2, May 1981 を参照。
- (25) 前近代エジプトの農村景観については、アリー・バラカート (加藤博・長沢栄治訳) 『近代エジプト農民反乱史』アジア経済研究所 1991年 (近刊) を参照。
- (26) Amīn, *op. cit.*, pp.260-262.
- (27) この *ghayra* という言葉は、Hans Wehr の辞書 (Cowan, *op. cit.*, p.690) によれば、嫉妬、激情、名誉意識、自尊心などの意味がある。また Lane, Edward, *Arabic-English Lexicon*, New York, Frederick Ungar Publishing Co.,1956, p.2316によれば、「ある人が彼の権利である事柄に参加するのを嫌うこと、あるいは、神聖かまた不可侵のものに対する用心」そして「妻の行動あるいは

行為に対する怒り」を意味するという。とくに最後の意味については, ghārati imra'tuhu 'alayhi (彼の妻は彼について嫉妬している) という用例 (*ibid.*, p. 2315) という妻の側からの感情も表現できるが, ここでのコンテクストで言えば, 名誉意識と結びついた自分の支配下にある女性に対する嫉妬の感情という feud 関係と社会的連帯意識の基礎となる感情を示していることが重要である。

(28) 本章注(14)を参照。

(29) 1958年の犯罪統計によれば, 2834件の殺人および殺人未遂のうち989件(34.8%)がサアルによるものであり, そのサアル犯罪のうち22%(218件)がアスユートで発生していた。Abū Zayd, Aḥmad al-*tha'r* : *dirāsāt anthrūpūlūjīya bi- iḥdā qurā al- ṣa'ūd*, Cairo, National Center of Social and Criminological Research, 1965, pp.10, 13. また, 最近の犯罪統計の発表数値によると, 1986年までの12年間の殺人事件の25%がサアルによるものだったという。そのうちアスユート県が35%, ソハーグ県が17%, ケナー県が14%で, これら上エジプト3県だけで全体の66%を占める。サアル犯罪者の職業構成は73%が農民であり, 文盲が80%, 居住地以外での実行が62%であった。また, 115件のサアルが起きた1983年(同年の殺人件数615件)において, 抗争の調停 (maṣāliḥāt) がなされたのは336件であったという(以上 *al-Ahrām* 紙 1986年5月23日記事より)。

サアル, とくに上エジプトにおけるサアルについては, 小説など文学作品の扱う素材となり, それを読むと近代的知識人が伝統農村をどうとらえているかについて知るところが多い。ここでは英訳された小説の例をあげる。Abd el-Koddous, Ihsan, "Martyr in Dishna," *I am Free and Other Stories*, trans. Trevor J. Le Gassick, Cairo, General Egyptian Book Organization, 1978; Sharouni, Yusuf, *Blood Feud*, trans. Denys Johnson-Davies, London, Heinemann, 1983.

(30) 著者アブー・ザイドは, 同書の序言の冒頭で「この短い研究は, エジプト社会を悩ませている社会問題の研究のために人類学的手法を用いたアラビア語による初めての試みであると評価されよう」という自負を示し, また別の箇所でも応用人類学の政策的価値を強調している (Abū Zayd, *op. cit.*, pp.9-11, 19-20)。この研究は, 初め, 国立社会学犯罪学研究所の機関紙 *al-Majalla al-Jinā'iya al-Qawmiya*, Vol.3 No.3, Nov.1963, に発表された。また, ほぼ同時期でこれに先行する調査報告として以下の研究もある。Ṣāliḥ, Kamāl Sa'd, *nizām al- tha'r wa al-'adāwa fī markaz dishnā dirāsa anthrūpūlūjīya ḥaqliya* [デシナー郡におけるサアルと攻撃の制度: 人類学的実証研究] Alexandria, May 1959, アレキサンドリア大学文学部人類学科修士論文 (未刊行論文)。

- (31) この nazla は、動詞 nazala (降りる、定住する等の意あり) から派生した枝村に関する呼称のひとつである。下エジプトでは一般にイズバ ('izba; とくに19世紀以降棉作拡大による新耕地に作られたものが多い)、上エジプトではナグウ (naj; 遊牧民の定住地の意味もある) が小集落や枝村の呼称として用いられることが多い。木村喜博「エジプトの農村—ナグウ・タラハーンの家
族構造」(『アジア経済』第16巻第10号 1975年10月) 参照。
- (32) 筆者自身が上エジプト農村(ソハーグ県中心)の幾つかを訪問した際にも、こうした^{メリーハ}廟を中心にした親族集団ごとに区画された街区(そこではそのアーイラの名の付いたハーラの名で呼ばれていた)で構成された村が多かった。ただ、221ページで述べた砂漠と農地の境界線に連鎖状につくられた村の場合は、こうした街区の構成はとらず、高い壁で囲まれた防御性の高い集合家屋(ある村ではこれを duwwār と呼んでいた)から構成される例もあった。
- (33) 注(30)で示したサーレフによるケナー県デシナーにおけるサール調査においても、同様にベイスン灌漑下の土地所有状況についての記述がある。そこでは、「封建地主」の所有地を除けば、農地の多くはアーイラ(同族)の共同所有地であり、部分的には個人所有地がある程度である。ただし、コプト教徒の所有地は個人所有である (Ṣaliḥ, *op. cit.*, p.15)。
- (34) 都市化とコプト・ムスリム関係の変化については、伊能武次「イスラム化とコプト・ムスリム紛争—エジプト—」(宮治一雄編『中東のエスニシティ—紛争と統合』アジア経済研究所 1987年)とくに152~154ページを参照。ムスリム・コプト間の流血抗争事件の代表例は、サグト大統領暗殺を頂点とする政治危機を導いた都市暴動である、ザウィーヤ・ハムラー事件(1981年6月)である。この悪化する都市生活条件を背景とした暴力事件は、コプト教徒における武装集団の形成を示した点で現代エジプト政治史上重要な事件であった。また、前出拙稿「エジプト—食糧補助金と都市貧困層」では、この事件を1977年食糧暴動と比較して、中東都市暴動の二類型という視点を提出した。
- (35) 加藤博氏は、土地法を事例として、sharī'a (宗教法)、qānūn (世俗法あるいは行政法)、'urf (慣行、'ada) の三つの法領域・法秩序をもった前近代イスラム社会の法体系を理論枠組みとして採用されているが、ここで用いられる村落内のカーヌーンとウルフは、そうした国家レベルの法体系の下位に位置する村落社会レベルの慣習法内部の「法」の構造を示すものである。加藤博「エジプトにおける私的土地所有権の成立」(『東洋文化研究所紀要』第91冊 1982年12月) 11~16ページ。
- (36) この debt としての feud について、前出のブラック・ミコードは、feud 社会とポトラッチを行う社会との比較という興味深い問題提起を行っている。Black=Michaud, *op. cit.*, pp.237-241.

- (37) このようなアラブ社会における父系親族集団の分析において、非分節的行動様式 (unsegmentary behaviour; この言葉は前出のゲルナーによるものである) の重要性と、その場合の姻戚関係にもとづく affinal set のもつ機能について重要な論点を出したのは、次のピーターズのレバノン・マロン派農村の研究である。Peters, Emrys Lloyd, "Aspects of Affinity in a Lebanese Maronite Village," J.G. Peristiany ed., *Mediterranean Family Structures*, Cambridge, Cambridge University Press. 1976. このピーターズの affinity をめぐる論点を政治学的分析に応用した研究として以下のものがある。Springborg, Robert, *Family, Power, and Politics in Egypt Sayed Bey Marei-His Clan, Clients, and Cohorts*, Philadelphia, University of Pennsylvania Press, 1982.
- (38) このカーヌーンとウルフの関係については前出の注(35)を参照。
- (39) イルドという名誉感情にもとづく男性優位の社会的価値観のもつ今日の問題については、拙稿「エジプトにおける家族関係の近代化」(『現代の中東』第2号 1987年3月)を参照。
- (40) Durell, Lawrence, *The Alexandria Quartet*, London, Faber & Faber Limited, reprint, 1974, pp.59,509,676. (邦訳は、高松雄一訳・河出書房新社から出版されている)。
- (41) Forster, E.M., *Alexandria : a History and a Guide*, London, Michael Haag Limited, reprint, 1982. pp.ix, xii (同書の邦訳は、中野康司訳で晶文社〈1988年〉から出版されている)。
- (42) 植民地型金融機構の形成と変革については、木村喜博『エジプト経済の展開と農業協同組合』アジア経済研究所 1977年を参照。
- (43) Durell, *op. cit.*, p. 552.
- (44) Abū 'Iyāna, Fathī, *sukkān al-iskandarīya dirāsa dimūghrāfiya manhajīya* [アレキサンドリアの人口：人口学的方法論的研究], Alexandria, Mu'assasa al-Thaqāfa al-Jāmi'īya, 1980, p. 531. ここでいう上エジプト4県とは、アスユート、ソハーグ、ケナー、アスワンである。その後の2回の人口センサスによると、1976年センサスで45万人の出生地を異にする移住者のうち、アスユートが5.1%ソハーグが14.4%、86年センサスによると同じく5.6%、16.1%であった。
- (45) Abū 'Iyāna, *op. cit.*, pp. 556-558.
- (46) カイロの塵芥収集業者 (zibbālin) は、多くが上エジプト農村出身のコプト教徒であり、しかも彼らを差配する元締でロバの塵芥輸送車の鑑札を独占しているのは西部砂漠のあるオアシスの村の出身者であるという。El-Hakim, Sharif Mahmoud, "The Role of the Family Kinship and Rural / Urban Migration in the Processing of Solid Waste in Cairo," *National Review of*

Social Sciences, September, 1976 を参照。また、前述のアハマド・アミーンの叙述にもあったように、上エジプト農村出身者の多くが行商の青果商に就業していたが、やがてカイロ最大の青果物市場ロード・エル・ファラグの卸売市場を支配する同村出身集団による「マフィア」を形成するにいたった。筆者自身も、このうちのソハーグ市近郊の一村を訪問したことがある。

また、このような労働集団を結成しないまでも、同村出身者が本書の第6章白杵論文のパレスチナ人の事例と同様に、エジプトでも同郷者団体ガマイーヤ (*jam'iya*) を結成している例は多い。このガマイーヤとムスリム同胞団の社会活動の近接性を示唆した研究として、店田廣文「都市の変容と同胞団の発展」(小杉泰編『ムスリム同胞団—研究の課題と展望—』国際大学中東研究科 1989年)を参照。上エジプト人以上に同郷結合の傾向が強い少数民族集団ヌビア人の都市移住問題については、以下の研究をはじめとして一定の研究蓄積がある。Geiser, Peter, *The Egyptian Nubian a Study in Social Symbiosis*, Cairo, The American University in Cairo Press, 1986.

- (47) この外国貿易部門のエジプト化=国有化によって、荷役業においても公共部門(1962年の法令によって設立された公企業 *al-Sharika al-'Arabiya li-l-Shahn wa al-Tafrigh* を中心とする)が支配的地位を占めるようになり、港湾労働者の約9割がこれに就業していた。他方、民間部門にはほぼ1割にあたる300人の少数の労働者集団が働いていた。民間部門は法律によって1000トン未満の荷役しか取り扱えないように規制を受けていたからである。Ghānim, 'Abdullah al-Ghāni, *hijra al-Aydī al-'Āmila*, Alexandria, al-Maktaba al-Jami'ī al-Hadīth, 1982, p.xvi。しかし、このガーニムの調査後の1978年、サダト政権の門戸開放政策の一環として公布された同年法令第106号によって、荷役業における公共部門の「聖域」が破られ、民間部門の取扱荷役量は、80年の18.6%から83年の43%へと飛躍的に増大した。*al-Ahālī* 紙記事(1986年4月26日)は、このように述べた後、新たな「独占的」な民間輸入・荷役業者が台頭し、労働大臣が警告を発するほど港湾労働者8000人の生活が脅かされていると伝えるが、実際、こうした新しい変化が上エジプト出身の労働集団にどのような影響を与えたかについては、筆者には不明である。

- (48) ガーニムは、1960年センサスによりアレキサンドリアからの移住者がソハーグ県1467人、アスユート県1355人でこれらの大半は帰還移動だとしている。(Ghānim, *op. cit.*, p.38)。しかし、1986年センサスによると、出生地がソハーグ県で前住地アレキサンドリアからの移住者という純粋の帰還移動者は160人(アレキサンドリアからの全移住者838人のうち19.1%)、アスユート県への帰還移動者は191人(同592人の32.3%)にすぎない(以上、『1986年人口住宅センサス』第1部「ソハーグ県」編〔表46〕、「アスユート県」編〔表46〕から算出)。

- (49) 拙稿「エジプトの移動労働者」(『アジア経済』第21巻第11号 1980年11月) 58ページ参照。
- (50) 同じ著者ガーニムによる次の研究を参照。Ghānim, 'Abdullah 'Abd al-Ghanī, *al-tabādul wa 'amalyāt al-istithmār wa al-iddikhār fī al-mujtama' al-mahallī al-taqīdī wa al-ḥaḍarī dirāsa muqārana fī al-anthrūbūlūjīyā al-iqtisādīya* [伝統的・地方社会と都市社会における交換と投資・貯蓄過程・経済人類学による比較研究], Alexandria, al-Maktaba al-Jamī'ī al-Ḥadīth, 1982.
- (51) ここでの職種名の訳出については、岩井弘融「港湾労働における親方制」(『病理集団の構造・親方乾分集団研究』誠信書房 1963年)、第3章に依った。この「近代的被覆の下に旧型の親方制がかなり濃厚に残存」(同上書 451ページ)した日本の港湾労働における親方・子方関係との比較分析は、本稿の目的の外だがこの2つの調査事例は比較研究の素材を多く含んでいる。
- (52) アラブの親族集団形成におけるこのカリーブの意味の重要性については、大塚和夫「上エジプトの親族集団内婚と社会的カテゴリーをめぐる覚書」(『国立民族学博物館研究報告』第8巻第3号 1983年9月)、およびD.F.アイケルマン『中東—人類学的考察』(大塚和夫訳)岩波書店 1988年 126~161ページを参照のこと。
- (53) このwaṭanとdawlaの他、国(くに)を表わす言葉としては、qawm, umma, milla, baladなどがある。これらの言葉が示す国家統合あるいは社会統合の中東における多様性に関しては、板垣雄三氏の所論を引き継いだ加藤博氏の次の論文を参照のこと。加藤博「近現代エジプトにおける国家と農民」(『歴史学研究』第586号 1988年10月増刊号)とくに164ページ。
- (54) 地中海・アラブ社会におけるパトロン=クライアント関係をめぐる代表的研究としては以下の論文集がある。Gellner, Ernest and John Waterbury eds., *Patrons and Clients in Mediterranean Societies*, London, Duckworth, 1977. 日本における最近の研究としては、次の黒木氏の論文がある。黒木英充「近現代レバノン社会におけるパトロン=クライアント関係」(長沢栄治編『東アラブ社会変容の構図』アジア経済研究所 1990年)。
- (55) このサールの都市社会における分解現象について、新聞の社会面の記事は幾つもの事例を提供している。
- (56) マックス・ウェーバー「『開放』経済関係と『閉鎖』経済関係」(厚東洋輔訳『ウェーバー』(世界の名著50)中央公論社 1975年 「経済と社会集団」第2章第2節から)。